

フィリピン大学・フィリピン政府派遣実施報告書(2013年度)

京都市内小中学校における多様な児童・生徒に対する 学習支援とフィリピン政府に対する事業結果のフィードバック

安里 和晃(文学研究科特定准教授)



目次

はじめに	1
実施状況	3
写真	7
研修に向けての抱負	11
日誌	21
研修報告	53
ボランティア報告	67

はじめに

本報告書は 2013 年 10 月より世界展開力強化事業「開かれた ASEAN+6」による日本再発見—SEND を核とした国際連携人材育成の一環で実施された「京都市内小中学校における多様な児童・生徒に対する学習支援とフィリピン政府に対する事業結果のフィードバック」について取り上げている。本事業は京都市で増大する言語・文化の背景の異なる児童・生徒を受け、京都市内小中学校における日本語教育・学習支援を実施するとともに、その結果をフィリピン政府に伝え、移民に対して開講される渡航前研修に実施反映することを目的としている。

2012 年より京都大学文学研究科、経済学研究科、農学研究科、教育学研究科、アジア・アフリカ地域研究研究科、経営管理大学院、東南アジア研究所、人文科学研究科、国際交流センターで構成されるアジア研究教育ユニットが基盤となり世界展開力強化事業は実施されている。これはアセアンを中心とする人材育成プログラムで、多くの事業が展開されている。

文学研究科では 2008 年から 2013 年まで GCOE プログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」を実施したこともあり、世界展開力事業においても初年度から活発な事業が展開された。本事業も GCOE プログラムのパートナーとしてフィリピン大学アジアセンターのソブリチャヤ教授や米野准教授が、次世代グローバルワークショップやリーディングプロジェクトに積極的に関わってきた。また 2013 年 2 月にはフィリピン大学版次世代グローバルワークショップも開催され、双方向的な教育学術交流が本格化した。こうした基盤のもと、2011 年、京都市教育委員会より外国に文化背景を持つ小学校児童・中学校生徒、とりわけフィリピン出身者に対する日本語教育支援・学習支援の依頼を受けた際も、フィリピン大学側からのアドバイスを受けながら実施することができた。

2012 年には京都大学文学部の学生にボランティアとして学習支援に加わってもらった。その際には学生ボランティアが実際には図書整理にかい出されるなど準備態勢が整っていなかったため派遣を中止し、学習支援の必要な児童・生徒に対する支援に熱心であった遠方の小中学校に場所を移して支援を実施した。

2013 年には、本事業「京都市内小中学校における多様な児童・生徒に対する学習支援とフィリピン政府に対する事業結果のフィードバック」の一環として、10 月から翌 2 月にかけて、6 名のボランティアが学習支援に従事した。多くは週に 1 度のペースで対象の小中学校の日本語学級で支援を実施した。学習支援に従事する学生には毎回支援内容を記述してもらい、日本語能力が不十分で授業に追いつくことができずに疎外されがちな生徒に対する理解を深め多文化の重みを実感してもらった。2014 年 1 月、学生はフィリピン政府在外フィリピン人委員会を訪問し、長官をはじめ職員に対して日本の状況について報告し、合わせてこれから日本に渡航する移民に対して日本の生活・文化・習慣・言語・学校制度な

どに関して 7 回に渡る研修を実施した(実践的な SEND の実施)。さらに在外フィリピン人委員会職員にも日本に来てもらいフィリピンに背景を持つ学生や小中学校との交流を図るなど、相互理解を深化させることで、両国が抱える多文化の状況や問題についての双方向的な取り組みのきっかけとした。

こうした社会貢献型・双方向型・異業種ネットワーク型のユニークかつ社会的な要請の高い領域において事業を実施することができたのは、フィリピン大学アジアセンター、フィリピン政府在外フィリピン人委員会、京都市教育委員会、受け入れの小中学校、また京都大学アジア研究教育ユニット関係者の協力によるものであり、心より感謝申し上げます。

京都大学大学院文学研究科・京都大学アジア研究教育ユニット
安里和晃

実施状況

本事業は「京都市内小中学校における多様な児童・生徒に対する学習支援とフィリピン政府に対する事業結果のフィードバック」と題され、日本とフィリピンの双方向から両地域にまたがる現代の課題、つまり異なる言語・文化背景を持つ児童・生徒の日本語教育・学習支援に取り組むことに主眼を置いたものである。いくつかの段階から構成されているが、文学部の学部生6名が参加し、2013年10月から2014年1月にかけて日本語教育支援・学習支援のボランティアに従事した。その成果はフィリピン政府在外フィリピン人委員会(Commission on Filipinos Overseas)において日本文化などに関する研修の実施(SEND)という形で発揮された(2014年1月14日から21日)。こうした事業での取り組みに対して単位は付与されないものの、同委員会からはインターンシップ修了証が付与された。

実施状況の詳細は以下のようなになる。

第1に、京都市教育委員会や受け入れ小中学校の協力のもと、市内小中学校における日本語教育支援・学習支援を実施した。これは近年言語・文化の異なる背景を持つ児童・生徒が増加しており、その学習支援が求められていることから、京都大学の学生ボランティアを募り、週に1回、2時間程度の学習支援をはじめたものである。ボランティアといえども個人の学習計画と進捗に影響を及ぼすことから、責任をもって参加できることを条件として募集した。京都市教育委員会の担当職員には事前の説明会を、また学校の担当教員にもオリエンテーションを実施してもらい、参加学生はボランティア保険に加入した。ボランティアの実施状況については毎回記録をつけてもらい、学生や教員とメールで共有した。また学習支援活動終了後の年度末には、小中学校の校長や教頭も参加し実施状況の報告会を開催し、意見交換を行った。

第2は、移民の置かれた状況を送り出し国政府に伝えるというものである。具体的には学習支援に参加した学生をフィリピンに派遣し、送り出しの政府機関で政府職員や移民を対象に渡航前研修を実施することである。多文化背景の児童・生徒の増加に対応するためには、受け入れの小中学校だけではなく送り出し国との協力が必要である。というのも両国の教育制度や生活環境の違いを理解せず来日する者が多いことも、来日後の問題の原因となっているからである。

そこで本事業においてはフィリピン政府在外フィリピン人委員会(Commission on Filipinos Overseas)と連携を取り、フィリピン大学アジアセンターからのアドバイスも受けながらプログラム内容などを調整し、2014年1月14日から21日にかけてフィリピンを訪問し渡航前研修の実施を行った。同委員会は海外移民に対して渡航前研修を実施している。とりわけ、日本には結婚や親せきを通じた移民が多く、自立した生活が営めるよう、一般渡航者向けの研修、配偶者を対象としたカウンセリング、ティーンエイジ向け研修を実施している。細分化されているのは、例えば結婚による移民は家族の一員として来日し、子どもは学校教育になじむ必要があることなど、一般の移民と異なる状況に置かれるからで

ある。

ところが、日本の事情をよく知らないフィリピン政府職員が渡航前研修を実施するには限界があり、同委員会は日本政府や教育機関、あるいは NGO との連携を模索していた。すでに韓国政府とは覚書を交わして双方向の取り組みを実施しているが、関係の深い日本とは連携がなかった。そこで学習支援経験者の知見を活用できないかということで Imelda Nicolas 長官をはじめとする同委員会と調整し、2014 年より実施することができた。研修の実施対象は、日本に移民として出国する一般成人、結婚移民、ティーンエイジャーで、合計 7 回の渡航前研修の参加者は 100 名程度であった。

研修内容は移民が来日後「社会的に孤立しないために」をテーマとして、教員がファシリテーターとなり 6 名の参加学生がそれぞれのトピックに従い、各自 10 分程度の報告と研修対象者とのディスカッションを実施した(実践的な SEND の実施)。内容としては、「日本の宗教と年中行事」、孤立しがちな日本の「冬の過ごし方」、公共機関を活用することで個人やコミュニティ活動を活発にするための「公共機関や公共交通の利用について」、「日本食と礼儀作法」、子どもが学校にうまく適応できるようにするための「日本の学校制度」、またコミュニケーション上の誤解を防ぎ、日本文化の理解を促進するための「非言語コミュニケーション」を取り上げた。

1 人 10 分程度とはいえ、英語でプレゼンし質疑に対応することは容易ではない。フィリピン研修が始まるまで、全員が会して発表演習を行う時間的余裕がなく、準備は各自で行い個別指導を実施した。全体の演習はフィリピン到着後に行った。研修における日本紹介は、移民のニーズに基づかなければならず、日本を対象化するというハードルがあったものの、学習支援の経験をもとに、伝えるべきポイントを絞った。また研修対象者とのディスカッションの時間も設けられ、後述する通り移民の置かれた状況についても理解が深まった。

最初は研修対象者がどのような人かわからないという事情から緊張した面持ちであったが、回数を重ねるにつれ理解も深まり余裕も出てきた。最後の報告は同委員会職員を対象としたものであり、日本の言語、文化、制度に関する質問を受け、次回以降のトピックに関する提案を受けた。7 回のプレゼンテーションを通じて、参加学生は自信を付けることができたという点で大きな教育効果があったと評価できる。また同委員会の日本移民研修担当者の中には来日経験がない者もあり、こうした交流は有益であった。こうした取り組みと研修の実施はインターンシップとして位置づけられ、在外フィリピン人委員会より参加学生に修了証が手渡された。

本事業の第 3 は、フィリピン政府在外フィリピン人委員会職員の招聘と共同調査の実施である。2013 年 11 月、在外フィリピン人委員会 (CFO) 職員 2 名を招聘し、セミナーを開催しフィリピン側の立場から、多文化の問題について論じてもらい、学習支援学生との交流を実施した。また日本におけるフィリピン移民の現場を訪問し実態調査を実施したが、効果的な国際的・学際的共同調査となった。こうした職員の日本理解の促進はフィリピン

政府の移民に対する研修能力の強化につながるものである。

今回は初めてということもあり、また日程上の理由から、多くは教員と同行し調査を実施した。訪問先は大阪、京都、岐阜、愛知、三重、神奈川、東京のフィリピン人コミュニティ、学校、職場、NGO、在東京フィリピン大使館などで、学生ボランティアが支援する小中学校も訪問した。そこでは熱心な小中学校の取り組みに、日本の外国人支援に対する誤解が解消され CFO 職員が目を見詰めて感謝する一幕もあった。また生徒との意見交換では、フィリピンに背景を持つ大学生が参加し先輩として意見を共有する中で、生徒全員が涙を流しながら語りあった。移民のロールモデルが存在しない中で、フィリピン系の生徒にとっては貴重な経験となったようである。またフィリピン系移民の職場訪問も大阪、岐阜、三重で実施した。多文化ゆえの困難や子どもを抱えた母親の置かれた立場に理解を示す雇用主がいる一方、借金を形に過酷労働を強いるなど人身取引に相当する被害者もいた。やはりこうした問題の早期発見のためにも国家を超えた双方向の取り組みが重要であることを痛感した。

政府職員の日本訪問は、短期間だが研修能力を強化でき、何よりも自信をもって職務に従事することができるようになった、という評価をもらっている。学習支援に従事する学生だけではなく、政府職員も含めて、国家を跨ぐ地域の課題に取り組む人材育成として有意義だったようである。

第 4 は、フィリピン研修におけるサブテーマ学習である。フィリピン研修のサブテーマとして、貧困と移民を設定しメトロマニラ内で関係機関を訪れた。訪問先はアジア開発銀行、ストリートチルドレン問題に取り組む NGO、低所得者集住地域、イスラムコミュニティ、フィリピン大学アジアセンターなどである。貧困地域の訪問は、学生にとって心理的負荷がかかることもあるため、長時間にわたる経験の共有を行った。このサブテーマにもとづく研修は、同じアジアの国々の一側面を直視し、グローバルな人の移動を広い視野から理解することに目的がある。最終的にはアジア諸国も含め多様な人々とのかかわりの中で私たちの生活が成立していることを理解し、移民や貧困といった現実を踏まえた世界観を涵養することを目的としている。訪問地についてはフィリピン大学アジアセンターからアドバイスを受けた。

第 5 は、フィリピン大学アジアセンターにおける教育・研究交流である。今回は米野みちよ准教授の日本関連授業に参加した。参加学生は日本研究のレベルの高さに驚いていたが、参加学生に対する質問はサブカルチャーが中心で、大いに話が盛り上がった。フィリピン大学アジアセンターは、日本語教師が不足しているという問題を抱えている。そこで今後はフィリピン大学アジアセンターでも、こうした取り組みをより充実した形で展開させる予定である。

日本語教育・学習支援は従来のような援助国、被援助国に分割される「他者」の問題ではなく、より身近な課題である。児童・生徒の多くは日本で生き、学習支援学生と共に社会をつくっていく立場になる。フィリピンでの研修や経験がグローバルな視点で共有する

課題に取り組む原動力になることを期待している。そのプロセスは貧困問題、階層問題、日比関係問題、移民問題に直面するプロセスであり、社会科学を実践する私たちにとって避けることのできないプロセスである。本事業は移民問題に送り出し国と受け入れ国双方から取り組むという双方向的なものであり、両国がともに未来を築く対象であるという視点に転換した社会的包摂を志向したものであり、社会的意義も大きい。

課題

学習支援は大学の試験期間、就職活動とも重なるため、小中学校と学期の調整をあらかじめしておく必要がある。お互いの目的はそれぞれ異なるため、実施計画を事前にすり合わせておくことが、学習支援を計画的に実行できる条件となる。

また、こうした取り組みを実施するには学生との十分な準備の時間をとる必要がある。ところが授業として展開しているわけではないため、フィリピン社会に関する基礎知識などを学習する時間が十分ではなかった。また研修実施のための全体演習が十分ではなかった。

本事業において単位は付与されないが、フィリピン政府在外フィリピン人委員会(Commission on Filipinos Overseas: CFO と表記)より修了書が発行され、また 2014 年度より授業の開講に伴う単位化を検討している。

さらに、学習支援活動をそれにとどませるのではなく学術領域に昇華させる必要がある。学習支援活動を、小中学校教員や児童・生徒、支援団体、フィリピン政府職員、移民で来日する人々など本研修の多様な人々とのかかわりを通じ、移民研究、調査法などの知見にまで引き上げたい。

報告書の構成

本報告書は、フィリピン研修参加にあたっての抱負、フィリピン研修の日誌、フィリピン研修の総括報告を掲載している。なお、在外フィリピン人委員会が来日した際のレクチャ資料、日本研修報告書などの資料は別途扱うことにする。









研修に向けての抱負

フィリピン研修にあたっての抱負

文学部社会学専修 3年 伊藤志帆

フィリピンで暮らす人にとっての「当たり前」である日常生活や習慣、文化を知りたいという思いは、2013年11月から始めた中学校での学習ボランティア活動が続ける中でついつい大きくなりました。中学校の放課後学習会には1年生1人と3年生3人が参加し、私は日本語や各教科の勉強を教えています。生徒は日本の学校に上手く馴染めないという共通の問題を抱えています。日本での滞在期間や日本語の習熟度はそれぞれ違うために、全く違う問題を持っています。考えてみれば当然の違いなのですが、私はボランティアに行く前はこのことに気付いていませんでした。このため、4年ほど日本にいて日常会話にはほとんど困らない中1の男の子が、数学の問題で「整数」の意味がわからず私に質問したときにはとても驚きました。表面的にはとても日本に慣れているようにみえても、外国から来た子供が日本の学校で、日本語で勉強するのは想像以上に困難で、サポートする日本人の側も気づけないことがたくさんあると悟った瞬間でした。

この経験から、外国の人に日本のことを伝える際には相手のバックグラウンドを知り、その文化や慣習など彼らにとっての「当たり前」を知っていること、少なくとも想像する姿勢を持つことが必要だと学びました。それがなければ、一方的な押し付けや相手の理解範囲を無視した態度をとってしまうことになります。

ボランティアをしてみて、私には圧倒的にフィリピン文化への理解、渡日してくる人々の状況への理解が欠けているということを感じました。今後のボランティア活動に生かすため、現地での生活を体験しその風景の中に身を置くことで、フィリピン文化と日本文化の違いについて考えたいです。さらに、渡日前の人々へ日本を紹介するプレゼンテーションをしてフィードバックをもらうことで、彼らが日本に対してどのような知識やイメージを持っているか知りたいと考えます。彼ら自身の渡航理由や日本での仕事、暮らしのイメージを聞き、どんな思いで日本に来ているのか理解を深めたいです。自分の日本に関する知識や体験を相手に話すことで渡航前の不安を和らげることができればいいと考えています。その他、現地のNGOへの訪問ではNGOメンバーとして活動する中で感じているフィリピンの問題点について詳しく聞き、フィリピン社会の問題点を考えたいと思っています。実りの多い研修になるよう、自分から積極的に現地の人々と会話し、彼らの考えや生活に触れたい、彼らの目でみた日本を知りたいと思います。

フィリピン研修にあたっての抱負

文学部社会学専修4年 額田聖菜

私は昨年10月から、フィリピンにルーツのある子供たちの学習ボランティアに参加しています。これは、3年次と4年次に受講した安里先生の「移民」に関する授業がきっかけでした。私は外国人旅行者に対してボランティアガイド活動をしており、外国人旅行者と触れ合う機会が多く、海外に興味があり、授業を受講していました。しかし日本にはあまり外国人は住んでおらず、「移民」の存在を実感することはありませんでした。しかしながら、これから先高齢化が進んでいく中で、グローバル化が進んでいく中で、日本でも移民の受け入れが必要となってくることは明らかでした。普段外国からの旅行者を相手している中で、たくさんの日本への称賛を聞いていましたが、いざ外国人が日本に住むとなると全く状況は異なるであろうと感じていました。これから先の日本の在り方を考える上でも、実際に移民として日本で生活する人々に会ってみたいという気持ちから、私は学習ボランティアに参加することを決めました。

実際に学習ボランティアで、フィリピンにルーツのある子供たちと出会うと、それまで考えていた難しいことは消えて、彼らの人懐っこい人柄に魅了されました。彼らと接する中で、彼らからたくさんの元気をもらっています。このことは私にとって想像しなかった、とても嬉しいことでした。しかし、彼らと仲良くなり、プライベートな話をする中で、彼らの日本での生活の苦勞を垣間見るようになりました。私が学習ボランティアで担当している中学3年生の女の子は、放課後の学習教室ではとても明るく話をするのですが、教室ではほとんど話をしないと云います。日本人の本音と建前の使い分けに、困惑し、人を信じられないと言っており、日本とフィリピンの文化の差に戸惑いを感じていることがよくわかりました。彼らが安心して過ごせる場としても、放課後の学習教室の必要性を感じました。

また、彼女からは100円ショップで商品を見ていたら、見た目が外国人だからという理由で万引きするのではないかとお店の人にずっと背後をつけられて傷ついたという話を聞きました。日本における外国人に対する「偏見」が、彼らを苦しめていることを知り、同じ日本人としてとても申し訳なく感じました。制度面に限らず、人々の意識の面でも、日本には移民を受け入れる土台ができていないことを痛感しました。

こういったボランティアの経験から、彼らとともに生活していく上で、やはり互いの国、そして文化をきちんと理解することは必要であると思います。特に、実際にその国を訪れることで、理解できることは多いと思います。今回の研修では、在外フィリピン人委員会

の職員の方々とお話をする機会があるということで、フィリピンから日本へ移住する人々の背景や抱える問題について、広い視点から理解できると考えています。また現地大学の学生との交流もあることから、フィリピン人の日本に対する意識やイメージを知ることができると思います。研修の経験は、帰国後の学習ボランティア活動に活かしていきたいと思います。

フィリピン研修にあたっての抱負

文学部社会学専修 3年 守谷克文

私は 2013 年の 10 月から中学校で、フィリピンから日本にやってきた中学生に勉強を教えるボランティアに参加しています。私の担当の中学生は 3 人で、みな高校受験を間近に控えた 3 年生なのですが、総じて日本語に苦手意識を持っているようでした。数学などフィリピンとの進度差が問題になってくる科目もありますが、やはりなによりも日本語の授業というのが彼らにとって勉強面で苦勞する点だと思われます。また日本語に関して言うと、勉強以上に深刻な問題として、私の思っていた以上に同じ年代の日本人中学生とのコミュニケーションに難儀していたというのがあります。日本語を上手に話せないことを意識しすぎて、教室ではほとんど喋らないという子もいました。つまり、友達ができないということなのです。

日本の小中学校や高校というのは非常に閉じたコミュニティなので、そこで円滑に人間関係を築くことができないというのは、精神衛生上とても負荷が大きいです。自分に置き換えて考えてみても、やはり信頼できる友達がいるとないでは生活の充足感が全く違うと思います。そしてこれは、中途半端なタイミングで異国に来た子供たちの大半がぶつかる壁だと思っています。私は今回のボランティアを通じて、この問題に対して言語の壁を取り除く以外に協力できることはないか、ということに関心を持ちました。言語は実際に使って覚えていくもので、今の問題は話す相手がいないことだからです。だから移民の子供たちに対する支援は、こうした同年代とのコミュニケーションをとるための事前知識や、子供たちが安心して話せる相手ができるシステムの整備に力をいれるべきだと思います。

そこで私はこのフィリピン研修で、そういった事柄に関してなにができるかについて特に積極的に学び取ろうと思っています。具体的には、もっとフィリピンの人たちの価値観を学び、実際に日本に来る人たちの日本に対する知識や意識を知ること、そもそも日本に来る前にできるであろうことや、日本に来てからどういったシステムがあれば彼らがコミュニケーションの面で安心することができるのかを模索していこうと思っています。他にもフィリピンでの研修を通して、今まで気付かなかったようなことがあれば、積極的に学んで行きたいと思っています。

フィリピン研修にあたっての抱負

文学部社会学専修3年 相築理穂

私はフィリピン研修に参加するにあたり、今後フィリピンから日本へ移住する女性や子どもたちの力になればと思っている。なぜなら、フィリピン生徒への放課後学習指導のボランティアを通し、彼らが学習や日本語に対して強くコンプレックスを持っていることが気にかかったからだ。小学校高学年から中学校程度の年齢で日本にやってきた生徒を指導しているが、彼らの年齢であれば、モチベーション次第でいくらでも伸びることが出来る。現に、彼らは話し言葉であれば非常にうまく日本語を操ることができている。だが、書き言葉や学習のための用語は使いこなせていない。また、本人たちの「問題文がわからないから問題が解けないだけ。問題が解けへんとか、アホやとか思われるのは嫌」という言葉は大変印象に残っている。

このような状況を少しでも改善するためには、彼らが日本にやってくる前の段階での対策が必要不可欠であるように思う。日本語そのものを学習することももちろんであるが、学習内容のギャップを埋めることもまた重要である。また、事前の日本語学習には、そもそも日本語を教える人材が必要であるなど、諸々の障害が多いように思われる。しかし、学習内容の格差を埋めることに関しては、比較的早く対策が講じられるのではないだろうか。学習指導ボランティアにあたり、もっとも強く感じるのが数学、もとい算数の演算能力の遅れである。日本の学習においては、小学校低学年で四則計算の基礎を叩き込まれるが、フィリピンではそうではない。結果、中学校3年生の生徒が未だに九九でつまずく、というような光景がよく見られる。計算式は世界共通である。少なくとも日本に来ると決まった段階で、四則演算に特化した勉強方法をとるだけでも、随分と状況は改善されるのではないか。

また、日本の学校もあくまで「受け入れる」ことが主眼であり、ともすれば“フィリピン生徒たちを受け入れる困難さ”のみに注意をもちいかれがちであることは否めない。10代前半という多感な時期に国を移る彼らの不安は言い表せないほど大きく、そこには様々な葛藤がある。ボランティアを通し彼らと交流を深める中で、クラスメイトたちとの付き合い方の悩みを打ち明けられることもしばしばである。“生徒として受け入れる”、“高校へ送り出す”といったことはもちろん最優先の事項であるが、彼らの内面をもっとケアしていけるような環境を日本においても整える必要があると感じた。

以上のような経験から、送り出し国であるフィリピンと受け入れ国である日本の両方に改善すべき点が多く残されていると考えた。フィリピン研修にあたり、私がボランティア

を通し感じたことを知ってもらおうとともに、今後の課題解決にあたり少しでも役に立てればと思っている。

フィリピン研修にあたっての抱負

文学部言語学専修3年 中元友加里

昨年10月頃から週に一度、フィリピン人の母親と日本人の父親を持つ中学生の学習支援ボランティアをしていました。彼らは日本語を流暢に話すことはできるものの、漢字の書き取り問題や読解問題になると手が止まってしまいます。また、全体的に数学が苦手で、特に文章題になると問題の意味の理解に苦しんでいました。また、授業についていけないと集中力がなくなってしまう、やる気が出ないなどの問題がありました。私生活では名前が珍しいという理由で、大声で知らない生徒に名前を呼ばれたりするそうです。そうした理由から友達と呼べる人が少ない、という悩みをかかえています。そこから、日本語教育環境や、国際理解を促す授業の不足の理由、更には母親であるフィリピン人女性の日本への移住に関する理由について興味を持つようになりました。

フィリピンでは在外フィリピン人委員会に研修に訪れます。これから日本に行くフィリピン人の方々に対しての研修を行ったり、日本行きが許可されていない方々のカウンセリングセッションを行うことになっています。フィリピン人の方への研修の中で私たち学生も日本に対するプレゼンテーションをする予定です。私は日本人特有のジェスチャーやマナーについて紹介するつもりです。またフィリピン大学講義にも参加する予定です。フィリピン人の大学生と話したことがないので、どのような教育環境で育ったか、今関心のあふことは何か、日本についてどのような意見を持っているかなどについて話をしたいと思っています。そして、日本語がわからないまま日本の小中学校に通うフィリピン人の生徒に関してどう思うかも質問してみたいです。

フィリピン研修にあたっての抱負

文学部地理学専修3年 立元圭

私は2013年の2月から3月にかけて、約3週間フィリピンへ、高校時代の恩師を訪ねて滞在させてもらった。そこでは様々な経験をさせてもらい、また、フィリピンの方々から多くの恩を受けた。帰国後、恩を受けたフィリピンの方々はどうやって恩返ししていこうか模索していた時に、安里先生の講義でこのような機会があるという紹介があった。日本に居ながらにして、フィリピンにゆかりのある人々に関わることが出来る。そういった機会を、前期は中学校、後期は小学校のボランティアで得ることが出来た。このような経験をもって、今回のフィリピン研修でさらにこれらを深めることが出来ると強く信じており、研修に参加したいと思った。

中学校や小学校でのボランティアの経験は、私にとって、様々なことを気付かせてくれる経験である。まず、子どもたちが日本という異国において順応して行く上での様々な問題を、近くで実感することが出来ることである。日本語の難しさや、フィリピンとの気候の違いなどが特にそうで、しかしながら、それらを克服しようとする子ども達の頑張りや成長に、自分自身も元気づけられている。また、日本語をサポートする側としての、日本語や勉強の教え方などを毎回毎回模索し、試行錯誤するというのも経験の一つである。

フィリピンに実際に行かせてもらうということで、この機会を通じて日本とフィリピンの架け橋になることが出来ると強く信じている。具体的には、自身がボランティアを通して実際に見てきたもの、聞いてきたもの、感じてきたことを直接フィリピンの人々に伝えることが出来るということが大きい。そこにおいて、フィリピンの人々からの意見もたくさん取り入れ、これからのボランティアやフィリピンとの関係性において、「強いつながり」を得たいと考えている。また、フィリピンで訪問させていただく様々な機関や施設と、それと同等の日本の施設との比較をもって、新たな視点を得たいと思う。「百聞は一見に如かず」の経験をこの機会ですることが出来ればと思う。

日誌

フィリピン研修の活動内容

日付	時間	活動内容
1月14日	14時	マニラに到着、ホテルにて軽食をとる
	16時	ショッピングモールにて両替、買い物、夕食
1月15日	9時30分	在外フィリピン人委員会（CFO）庁舎内見学
	11時30分	CFO オフィスで移民に関する研修
	14時	CFO のカウンセリングセミナーを見学
	16時30分	ストリートチルドレンが経営するカフェを訪問
	17時30分	ストリートチルドレンを預かるレベル1のシェルターを訪問
1月16日	9時30分	アジア開発銀行（Asia Development Bank: ADB）見学
	12時	ADB 近くのショッピングモールにて昼食
	14時	CFO にてプレゼンテーション
	16時30分	God Bless Open Day Center にて視察後、近くのコミュニティを2つ視察
	19時	夕食（中華料理）
	21時	ミーティング
1月17日	10時	国立美術館見学
	13時	CFO にてプレゼンテーション
	17時	NGO 団体訪問
1月18日	10時	CFO にてプレゼンテーション
	16時	フィリピン大学での授業に参加
	19時	米野教授と会食
1月19日	12時30分	キアボ教会
	13時30分	ゴールデンモスク、イスラム教徒集住地区
	14時30分	イントラムロス
	16時	サンチャゴ要塞
	18時	シャングリラホテル
	19時30分	シューマート（SM）
1月20日	11時	CFO にてプレゼンテーション
	13時	CFO にてプレゼンテーション
	15時	CFO にてプレゼンテーション
	17時	CFO カウンセラーとのセッション（プレゼンテーション）
1月21日		日本帰国

日誌 1月14日(1日目)

文学部言語学専修3年 中元友加里

●スケジュール

14時 マニラに到着、ホテルにて軽食をとる

16時 ショッピングモールにて両替、買い物、夕食

マニラに到着、ホテルにて軽食をとる

関西国際空港から4時間20分を費やしマニラに到着。マニラの第一印象は、「少し蒸し暑いが過ごしやすい」「意外と建物が近代的」「道路が整備されている」「大通りからは屋台があまり見当たらない」「日本車が多い」「コンビニがある」(セブンイレブン、ファミリーマート)などであった。川を隔てた向こう側には、貧しい人々が住んでいると思われる家々が密集していたことも、印象的であった。貧富の差の激しさを垣間見た経験であった。ホテルに到着し、ロビーフロアのカフェで軽食を取った。若い店員が多く、学生が研修生として働いていた。無償労働であるばかりか、むしろお金を出して研修に参加しているとのことであった。

ショッピングモールにて両替、買い物、夕食

チェックインを済ませ、着替えの後両替をするために歩いてショッピングモールに向かった。

同じショッピングモール内でも両替のレートが格段に違い、驚いた。両替所で働いていた女性は10年前日本でホステスをしていた経験があるらしく、少し日本語を話すことが出来た。そして、より大きなショッピングモールへ行った。まずはショッピングモールの中にあるスーパーへ行った。中国と自由貿易協定を結んでいる関係で、溢れんばかりの中国産果物が並んでいた。魚介類売り場もユニークにディスプレイされていて非常に興味深かった。日本や韓国、アメリカなど様々な国からの輸入食品が店頭に並んでいた。たくさんお米の種類があったことも印象的だった。そこでドライマンゴーなどのお土産を買った後、TREASURE SHOPへ行った。日本政府がフィリピンを侵略していた頃のペソ札が販売されており、日本による侵略が実際にあったということを実感した。夕食はショッピングモール内の食べ放題レストランでとった。日本食からフィリピン料理、イタリア料理、中華料理など200種類以上の料理が並んでいた。そこでは4人組のバンドが歌を歌いながらテーブルを回っていた。日本の曲、というと日本の曲を歌ってくれた。ビートルズやフィリ

ピンの曲、人気の曲を披露してくれた。その歌声と演奏は、とても上手で感動的であった。

日本の曲を歌ってくれた男性は 1980 年後半に横浜で、1991 年には千葉での居住経験があるそうで、その頃は男性ボーカルのフィリピンバンドが流行っていたということである。しかしカラオケの普及により、客と一緒にフィリピン人女性が歌うという形になり、フィリピンバブがたくさんできた、という安里先生のお話はとても興味深いものであった。



写真 1：ショッピングモール内でのレストランにて、バンドの演奏

(撮影者：立元圭)

日誌 1月15日(2日目)

文学部社会学専修3年 守谷克文

●スケジュール

- 9時30分 在外フィリピン人委員会（CFO）庁舎内見学
- 11時30分 CFOのオフィスで移民に関する研修
- 14時00分 CFOのカウンセリングセミナーを見学
- 16時30分 ストリートチルドレンが経営するカフェを訪問
- 17時30分 ストリートチルドレンを預かるレベル1のシェルターを訪問

在外フィリピン人委員会（CFO）庁舎内見学

まずは1階の長期滞在移民の登録所を案内してもらう。そこで実際に登録に必要な書類を見せてもらい、手続きの様子を見学した。次に2階のカウンセリングルームで、国ごとに移民が従事する仕事の違いから、目的国別にカウンセリングを行っていることを教えてもらい、その後、3階の個別カウンセリングルームで日本に行くフィリピン人にあいさつをした。また、9階にある韓国行き移民のカウンセリングルームで、ティーンエイジャー向けのカウンセリングを見学した。ここで安里先生が韓国に行った後のことをクライアントに質問したところ、半数が目的なしと回答し、残りは労働と勉強を目的としていることが分かった。

CFOのオフィスで移民に関する研修

CFO職員の、IVYさんのプレゼンテーションを拝聴した。昼食をとりつつフィリピン移民の現状について教えていただいた。CFOではカウンセリングを含めた登録から出国までの一連の手続きを行っている組織であり、フィリピンの資金の10%は移民からの送金であるということであった。また、移民サポート機関は大統領直轄のCFO以外にもあるということであった。フィリピンは世界3位の移民輸出国であり、移民は永住(47%)、一時的(40%)、不法滞在(12.8%)の3種類。滞在先トップはアメリカ、サウジアラビア、UAE、オーストラリア、カナダ、日本。日本には長期滞在が多く、このうち82%が女性(主に結婚)。移民で最も多いのは20~30代。日本に来る移民が多い地区は日系人が多いダバオで、移民の多さはブローカーの多さに影響を受ける。移民の職業は主婦(44%)が多く、このうちの大半が農家に嫁いでいる。その次に多いのは学生ということである。移民の教育水準は多くが大学中退レベル。母親は子どもを大学に無理に行かせるようなことはしない。日本での

進学はやはり難しく、移民の子供は連れてこられる前にもっとカウンセリングが必要ではないかと感じた。15人中1人のみが合法的な結婚で、それ以外は偽装結婚である、ということである。これはCFO以外がそのあたりに厳格ではなく、政府職員がワイロをもらう場合があるから。偽装だとすぐにわかるのは、夫に関心が明らかでない場合、年の差結婚の場合などである。またフィリピンには離婚の制度がなく、結婚無効の手続きを取らなければならない。日本への移民が最近減ってきており、それは台風と日系人がもういなくなったからである。資金管理能力のなさも目下のところ問題である。プレゼン後に今後のCFOでの予定を調整した。また、長官にも挨拶をし、写真撮影を行った。

CFOのカウンセリングセミナーを見学

15人ほどの女性と1人の男性がクライアントとして参加。行先は東海地方と広島が多いということである。すでに日本に行ったことがある人がほとんどで、日本語を話せる人も何人か出席していた。講師の名前はテアさんで、結婚に必要なものと、そのために出来ることというテーマのディスカッションを行った。結論として、相手に尽くすだけでなく自分のことを大切にすることも大事、コミュニケーションをきちんと取るのも大事ということだった。

ストリートチルドレンが経営するカフェを訪問

カフェの二階でsocial workerにストリートチルドレンの現状についてのプレゼンテーションを受けた。ストリートチルドレン支援のNGOで行っているプログラムの説明やデイケアセンターで行っている食料の配布、学校に復帰させるための授業について教えていただいた。職業訓練のようなことも行っている。支援の内容としてはレジデンタルケアとトレーニングセンターがあり、レベル1では5~12歳の子どもを短期間預かる。月1回の家族との面会、授業とその証明書の発行などを行っている。レベル2では長期間のプログラムを行い、目標はすべての子どもが授業を受けられるようにすること。100%の子どもが家族の問題をかかえている。また、アフターケアプログラムも存在し、ストリート訪問やトレーニングを行っている。ここでの問題は、施設とストリートとの環境の差に子供が戸惑いを感じていることである。ほかにも宣伝活動や農業体験（コーヒー、ココナッツ）も行っている。カフェのコーヒーもここで栽培したものである。施設に来る子供の多くは虐待を受けていたにも関わらず、親の元へ戻りたがる傾向にある。子どもの保護方法は、公的機関の確認と子どもの同意を得ることが前提である。また捨てられるのは子供のほか老人もいる。老人は環境が整っておらず、支援は困難である。マニラにはほかにも支援団体は数

多く存在する。どうして子どもがストリートチルドレンになるのかというと、親に捨てられ、盗みやドラッグ、売買春に手を染めてしまうからだ。すべての原因は親の育児の問題（暴力、放棄、貧困）である。この NGO は子どもたちが生活管理能力を身につけ、更生するよう支援している。フィリピンの人口の 43% は子どもだが、600 万人の子が学校に通わず、そのほとんどが労働に従事している。またストリートチルドレンの多くが性的被害にあっている。ストリートチルドレンの問題は世界中のものであり、85% の子どもが発展途上国にいる。ストリートチルドレンが注目を浴びたのは 1980 年代からであり、これは警察が彼らを夜に拘束するからである。彼らは **children on street**(70%、親と暮らしていて路上で働いている)、**children of the street**(25%、家族と離れている)、完全に捨てられた子供たちに分類される。ストリートチルドレンのまま大人になるケースがあるのも問題であり、14~17 歳の男の子が多く、大家族で親が低学歴の子どもが多い。親は田舎から出稼ぎにきた者が多い。物乞いのためにわざわざ汚い恰好をしている子供たちもいる。愛情は欲しいが大半は現状に満足しているという。NGO のアプローチは主に 3 つ。コミュニティベースの支援（親との関係改善）、センターベースの支援（施設での生活訓練）、サイコリーベースの支援（訪問タイプで、彼らの現状を知ることが目的）である。彼らにお金を渡してもシンナーを買ってギャングに流れてしまうため渡さないようにしている。10 人中 5 人は支援プログラムをドロップアウトする。高年齢になるほど、その割合は低くなる。

プレゼンテーションの後、カフェの隣にあるストリートチルドレンが経営するリサイクルショップを訪問した。日本のものが置いてあり、その多くが寄付。食器や服などを欲しがっている様子だった。

ストリートチルドレンを預かるレベル 1 のシェルターを訪問

住み込みの職員が 6 人いて、週に 5 日働いている。今いる子供は 15 人で、収容自体は 500 人可能。個別の授業時間がある。子どもがダンスを披露してくれた。そのあと少しの間遊び、お土産のお菓子を配った。明るい子供たちが多かった。漫画や挨拶など日本のことを知っている子供も多かった。最後に寄付金 5000 ペソを渡して退館した。



写真 1:登録所(撮影者：立元圭)



写真 2:カウンセリング見学 (撮影者：立元圭)



写真 3:カウンセリング中のディスカッション
(撮影者：額田聖菜)



写真 4:IVY 氏のプレゼンテーション
(撮影者：立元圭)



写真 5:長官に挨拶 (撮影者:立元圭)



写真 6:ストリートチルドレン経営のカフェ
(撮影者:立元圭)



写真7：カフェ2階での研修（撮影者：立元圭）



写真8：ストリートチルドレンのお店
（撮影者：立元圭）

日誌 1月16日(3日目)

文学部地理学専修3年 立元圭

● スケジュール

- 9時30分 アジア開発銀行(Asia Development Bank: ADB) 見学
- 12時 ADB 近くのショッピングモールにて昼食
- 14時 CFOにてプレゼンテーション(1回目)
- 16時30分 God Bless Open Day Centerにて視察後、近くのコミュニティを2つ視察
- 19時 夕食(中華料理)
- 21時 ホテル着、ミーティング

● アジア開発銀行

まず、アジア開発銀行 (ADB) の紹介ムービーを見せてもらい、その後施設を見学。図書館や Research Department、食堂等を見学。Research Department では、インドネシアの研究者と話をさせていただく機会があった。紹介ムービーは、主に ADB が何をやっているか、ADB のネットワーク、組織理念や Mission、組織構造などの説明、2020 年に向けての Strategy が流されていた。ADB の主な出資者は日本やアメリカなどで、アジア太平洋地域の貧困問題の解決を理念として設立された銀行である。出資金額の関係かは定かではないが歴代の総裁は日本人で、前の総裁は今の日銀の総裁である黒田氏であった。本部はマニラにあり、1966 年に設立、現在 67 のメンバーによって成り立っている。主な仕事としては、公的機関(Public)と私的機関(Private Sector)の間を、投資という形を通して取り持っている。開発における諸問題の金銭的なアドバイスや援助を行っている。様々な基金が用意されており、例えばスマトラ沖地震の基金や、東日本大震災の基金、他にも急な災害や気候変動などによる環境の変化に対応する基金等もあった。2020 年に向けての Strategy において、重点的に取り組むエリア(Core Operational Area)はアフガニスタン周辺とされていた。特定のエリアに向けての戦略を立てている一方で、それ以外のエリアには Health(健康)、Agriculture(農業)、Disaster and Emergency Assistance(災害や緊急時の援助)というキーワードのもと、開発援助に取り組むという話であった。紹介ムービーの後は施設内を案内してもらった。図書館や食堂等、開けたスペースで、グローバルをまさに体现するような施設であった。広い廊下には、各国からの贈り物が展示されており、日本から寄贈された人形も展示されていた。Research Development においては、インドネシアの研究者とのディスカッションの機会をいただいた。そこでは我々のボランティア経験や、フィリピン、日本の経済的な観点での意見の共有、また、研究者の方からの簡単な講演をう

けた。フィリピンの経済の現状、国家レベルでのシステムの悪循環など貴重な話をお聞きすることが出来た。



写真 1:アジア開発銀行での集合写真 (撮影者:ADB スタッフ)

CFO でのプレゼンテーション(SEND 実施)

14時からは昨日同様、CFOにて渡航前研修(Pre-Departure Orientations: PDOS)に参加。今日は初めてのプレゼンテーションの機会であった。PDOSの参加者は20名程で、半分以上が男性であった。プレゼンテーションは守谷→額田→伊藤→立元→中元→相築の順で行った。途中トラブルなどがあったが、無事全員がプレゼンテーションを終えることが出来た。(感想・反省は後述)



写真 2:CFO でのプレゼン風景 (撮影者: 立元圭)

● God Bless Open Day Center の見学

プレゼンテーションの後、昨日お世話になった NGO の方に案内してもらい、Social Worker が関係をもっているコミュニティの見学を行った。その前に God Bless Open Day Center の見学を行った。そこは Social Worker を中心にコミュニティの子どもたちに教育やカウンセリング等を行う施設であった。施設において子ども達に今足りないものは学校に必要なものということであった。また様々なイベント等も開催しており、誕生日会や映画鑑賞会なども開催しているということである。その後、コミュニティを 2 つ見学させてもらった。1 つは以前までは劇場だったところに出来たコミュニティで、川沿いに人家が密集して生活していた。犬や猫などの動物がたくさんおり、子ども達の元気があふれるコミュニティであった。密集した人家は入り組んでおり、狭小な住宅の中にたくさんの人が住んでいるという話であった。2 つ目は橋の下に不法に集住しているコミュニティで、多くのストリートチルドレンがいた。電気等は配線をいじって不法に手に入れる、トイレ等が設備はないため川でそのまま用を足すなど生活環境は劣悪なものであった。



写真 3: インフォーマルセクターの様子 (撮影者:額田聖菜)

ホテルでのミーティング

夕食を済ませホテルに到着した後、1 日の感想などをシェアするミーティングを行った。時間にして約 1 時間程であった。1 日の時間軸に沿って、自分自身が感じたことや意見などをフランクに共有する、非常に有意義な機会であった。以下にミーティングで出た意見を記述する。

- ・ ADB の施設の豪華さ、充実さにインフォーマルセクターとの心理的な距離感を感じた。
- ・ フィリピンの中において上下格差がはっきりと見えて、衝撃的であった。これらの格差は先天的なものか、後天的なものかは分からないが、ADB の存在がこの問題の解決の一助となりうるのだろうか。
- ◆CFO でのプレゼンテーションに関しては以下のような感想が出た。
 - ・ 一番言いたいところが相手に伝わっていなかったという印象
 - ・ 手応えがなかった。
 - ・ 準備不足
 - ・ もっと笑顔でプレゼンテーションを行うように心がけるべき。
 - ・ 空回っていた感覚や場違いであったと思えるような空気感
 - ・ 情報量の調節をしなければならない。
 - ・ 「このプレゼンは退屈だから～」などといったネガティブな印象を与えるメッセージは極力使わないようにする。
 - ・ はじめにしては堂々とプレゼンをしていたように思える。
 - ・ 主張はシンプルに、練習あるのみ。
- ◆インフォーマルセクターでの経験は、各々に衝撃を与えたようだった。
 - ・ 想像していたより、現実には厳しいように見える。しかしそこで生活する人々の顔は明るかった。
 - ・ 迷路みたいに密集しているコミュニティ
 - ・ 日本人や韓国人等、コミュニティを訪れる外国人に慣れているような印象。名前をすぐ聞くように教育されていた。
 - ・ 犬、ネコが多い。ペットとしての扱いは日本に比べてタイト。ペットボトルで犬の頭を叩いたり蹴ったりしていた。
 - ・ 犬やネコはやせ細っているものが多かったが、コミュニティで生活する子ども達も同様にやせ細った子ども達が多かった。
 - ・ 入口の店で金銭的な理由で物を買ってとねだる子ども達がいた。
 - ・ どうやってこのようなコミュニティで人と接すればいいのか。
→博物館的な態度で接するのは良くない。特に男性には挨拶を欠かさない。
 - ・ Social Worker のおかげなのかもしれないが、我々のような来客に対して、大人達の対応は丁寧であった。
 - ・ Street Children の定義が分からなくなった。コミュニティの中から誰が施設の入居が許可されるのか。
 - ・ 人身売買や援助交際などの温床になっているような印象

- ・ コミュニティの秩序はどのようにして保たれているのか
→狭い家でやりくりしている。プライバシー等はないので色々な問題があると思われる。
- ・ このようなコミュニティの人たちは出稼ぎに行きたくても行けない。金銭的な理由で動くことが出来ない。
- ・ 1人の人にかかる命の値段の差を感じた。本当は一緒のはずなのに、すごく矛盾を感じた。
- ・ 矛盾を背負って生きるという感覚。個人之力では解決出来ない。このような現実を目の当たりにして、あまりにも気負いすぎて、全てに不信感を感じてしまう人がいるが、それは考え過ぎ。
- ・ ドラッグやアルコール中毒などによって起こる問題も多いだろう。
→ドラッグが食べ物よりも安い値段で取引されているという現状。
- ・ 学校に行くことが、社会的地位上昇の手段。
- ・ コミュニティに暮らす人は、毎日何を思っているのだろうか。
- ・ 子どもが多いのは、子どもが出来てしまうから？
→フィリピンの考え方の問題。避妊について、母乳で子を育てないといったこと等が1つの理由としてある。性に対しての考え方の違いがある。
- ・ 自分自身ストリートチルドレンを汚いと思う心の汚さを感じてしまった。
→自分を守るということを忘れずに。人々とのふれあいと、自分を守るということは別。
- ・ 犬のフンなどが自然に落ちているようなコミュニティ
- ・ ゴミ箱の概念が無い。
- ・ テレビで今までこのようなところは見たことがあったが、空気感や臭いを肌で感じる事が出来て、衝撃的であった。

以上のような話が率直な意見として出た。今日の行程が ADB のような施設の見学や、インフォーマルセクターの見学などということもあり、同じ都市の中において非常に格差を感じた経験であり、そこに衝撃を受けた参加者が多かった。3 日目で得た、「百聞は一見に如かず」の経験を残りのフィリピン滞在に活かしていきたい。

日誌 1月17日(4日目)

文学部社会学専修3年 伊藤志帆

●スケジュール

10時～12時 国立美術館見学

13時～16時 CFOにて日本渡航希望者へのプレゼンテーション

17時～19時 NGO 団体訪問

国立美術館

芸術作品を展示する館と、歴史、植物、動物について展示する館に分かれている。芸術作品館では、日本占領期に関連する作品を集めた部屋が印象に残った。占領期には芸術的表現が禁止されていたので、この部屋の展示作品はすべて戦後に制作されたものである。まず目を引くのは、日本兵が一般のフィリピン人を虐殺している大きな絵画。解説者によると、日本兵が戦闘力のある男性や抵抗した女性や子供を殺害し、女性に対して性的暴力をふるったことを描いたものである。そのほか、concentration campの様子を描いたものなどがある。解説者は終始穏やかに説明してくれた。東アジアや東南アジアの一部の国々の歴史を知ろうとすると、日本軍の存在、その行いを避けては通れないのだと感じた。

解説者は、すべての展示部屋で絵の技法や意味だけでなく絵の描かれた背景にも言及してくれたので、絵画を通じてフィリピンの歴史を知ることができた。

CFOにてプレゼンテーション (SEND 実施)

昼食の後は2回目のプレゼンテーションを行った。今回は女性配偶者20人ほどに対するセッションだった。彼女たちの夫は日本人で、行先は東京、広島、名古屋、大阪、福岡など。子供を日本に連れていく予定の人は3, 4人ほど、日本で子供を作りたい人は4, 5人ほどだった。彼女たちが日本に行くにあたっての懸念は、言語、文化受容、気候、仕事についてなどだった。今回は1回目よりも慣れて、比較的スムーズにプレゼンをすることができた。昨日も感じたが、フィリピン人渡航者は予想よりも日本語や日本についての知識を持っていた。お箸を使ったことがある人は数人いた。



写真 1: 日本の食文化についてプレゼンする相築さん(撮影者: 伊藤志帆)



写真 2: 全体での集合写真(撮影者: CFO スタッフ)

NGO 団体「Development Action for Women Network」訪問

1996年2月6日に設立され、現在に至るまで日本で被害をうけたフィリピン人女性に焦点を当てて活動している。代表者によるプレゼンテーションの内容は以下の通りである。

・フィリピン人の移民

1970年代: 渡航者は主に男性で、行先は中東。

1980年代: 女性渡航者の増加。アメリカからヨーロッパ、アジア、中東など様々な渡航先。

日本に渡航するフィリピン人エンターテイナー (Overseas Performing Artist, OPA) は1996年から上昇し、2002年ごろ7万人を記録するが新しいビザ制度によって急速に減少

した。エンターテイナーの受け入れ先としては日本が最大で、韓国、中国、香港、マレーシアなどにはほとんど渡航しない。東日本大震災の後フィリピン人エンターテイナーの需要が増えた。エンターテイナーの多くはパスポートや文書を没収され、不法な契約をさせられた。その他、賃金が低い、ホステスとしての労働させられる、複数の店をたらい回しにされるなどの不当な扱いを受けた。特にフィリピンで訓練を受けてエンターテイナーとして日本に来たフィリピン人にとってホステスとして働かされることはつらいものであった。また、日本人配偶者から暴力を受けたり、売春させられたりした。日本で生まれた子供は、日本で戸籍登録をするためフィリピンに帰っても住民登録をせず、フィリピンでの文書がないことが問題である。以前は生後認知の JFC は日本での戸籍登録ができなかったが、現在ではできるようになった。フィリピンに帰国しても、生活に再び復帰、再統合されること(reintegration)は難しいという。

・ DAWN の主なサービス

- 1、 **Social Service** : ケースマネジメント、法律相談、ヘルスケア、教育補助、カウンセリング、日本語と日本文化の教育、ワークショップなど。
- 2、 フィリピンでの自立設計支援プログラム : DAWN の事務所で織物、縫い物の方法を学び、ハンドメイドのショールやリュック、カバン、洋服などを作る。織物は難しいが、1, 2 週間で慣れるという。できた製品は国内外のバザーで売る。オンラインショッピングの計画もボランティアによって進められている。
- 3、 リサーチ&広報活動 : ニュースレターの発行、書籍出版 (『フィリピン人女性エンターテイナーの夢と現実』など)、劇団あけぼのの日本公演 (大阪大学や横浜国立大学と一緒に日本で劇公演を毎年 5 月に行う。子供たちの自信につながる)。
- 4、 日本人の父親との再会支援 : フィリピン人の母親と日本人の父親の間に生まれた子供が、父親に会うための支援をしている。ただし、母親と父親の関係が悪く、経済基盤がないのに、やみくもに母親と子供が日本に行くことには反対している。父親に拒絶されて傷つくのは子供たちだからである。



写真 3: 手織機を学ぶ女性(右)と DAWN リーダー (左) (撮影者: 額田聖菜)

日誌 1月18日(5日目)

文学部社会学専修3年 相築理穂

●スケジュール

10時 CFOでのプレゼンテーション

16時 フィリピン大学での授業に参加

19時 米野教授と会食

CFOでのプレゼンテーション

土曜日なので、聴講者は8名のみ。全員が女性で、日本に行くことを予定している（写真1）。行き先は名古屋、山形など。数名は少し日本語を話すことができる。日本の印象を尋ねたところ、「文化や労働の違い」「仏教」「もてなしの精神」「気候（フィリピンに比べて寒い）」「マナーに厳しい」などの答えがあり、以前に日本に来た経験から答えた人もいた。また、日本において何を望むか、という質問には「良い収入」「姑との良い関係」「家族との再会」といった答えが得られた。また、移住先に日本を選んだ理由としても、「時給で給料がもらえる」など経済面に期待する声が多かった。あるいは、親戚の中にすでに日本に出稼ぎに来ている人がいるため、その伝手でやって来るという人も数人いた。



写真 1: CFOでのプレゼンテーション（撮影者：立元圭）

私たちのプレゼンテーションを聞いた後、しばらく懇談をしたのだが、不安事項の一つに「日本人があまり感情を表に出さないこと」があげられていた。特に、夫とのコミュニケーションにおいて不安を感じているようだった。日本人男性はしばしば、働いて家族のために収入を得ることを愛情表現と考えるのだと伝えたが、感覚的には理解し難いようだ

った。また、日本人の中には「言わずとも伝わる仲」「以心伝心は美德」といった考えがあるが、フィリピンの人々には受け入れ難いものかもしれない。日本に来て得た収入で誰を支えるのか、という質問には家族を中心に4人から8人、あるいは送金額で養えるだけ養う、という返答が得られた。養う人数に差はあるが、彼女らが家族や親戚の期待を背負って日本に来ることは間違いない。

フィリピン大学での授業に参加



写真 2: 線路脇のコミュニティ (撮影者: 額田聖菜)

その後、一度ホテルに戻ってからフィリピン大学へ向かった。移動途中に、線路脇のコミュニティを見学した (写真2)。闘鶏の大会が開催されており、我々が通りかかると見やすいように場所を空けてくれた。闘鶏場の雰囲気は日本で言うと競馬場で、男性らが賭博に夢中になっていた (写真3)。「中国人かい?」「こんにちは!」などと声をかけられることが多く、フィリピンの人々の陽気さや人なつっこさを感じた。それから、線路に走らせている、竹や木で作った手製のトロッコ「カリトン」に乗った (写真4)。駅と駅の間の移動手段として利用されているらしい。電車が来ると、乗客は降り、運転手がトロッコを背負って持ち上げて電車を避ける。電車の速度はとても遅いので、簡単に避けることが出来るのだ。乗ってみると、直に受ける風が気持ちよくとても楽しかった。線路脇には彼らの住居や畑が作られていた。畑を作るのは、農耕文化の地域からやってきた人々独特の習慣なのだそうだ。



写真 3: 闘鶏に夢中になる人々 (撮影者: 額田聖菜)



写真 4: 「カリトン」試乗 (撮影者: 額田聖菜)

フィリピン大学では、米野教授の授業に参加した (写真5、6)。参加している学生は日本について研究している大学院生で、そのテーマは政治科学からサブカルチャーまで多岐に及ぶ。授業内容は日本の政治史で、今回は戦後の国際関係を中心とした内容をフィリピン大学の院生が発表した。大まかな流れは日本の高校で学ぶ日本史の内容と変わらないが、保守政党と共産党の動きにやや重きを置いた内容になっていた。また、日本の教科書ではあまり踏み込まない、サンフランシスコ平和条約や日米安保条約、朝鮮戦争における日米、日中間の思惑にも触れる内容になっていた。アメリカの日本に対する影響力や、日米の力関係に対する理解が深かったように思う。印象的だったのは、靖国神社に関連する内容になると、フィリピン大学の学生たちが身を乗り出すようにして話を聴いていたことである。靖国問題は、アジアにおいて若者から戦争経験者まで多くの人々の関心事であるのだと強く感じた。

発表のあとは、私たちも加わってディスカッションを行った。内容は政治史にこだわらず、日本に関するあらゆることについて。草食男子、なでしこ、ボーイズラブ、韓流や K-POP、若者の低投票率など、時事的でかつ私たちにも身近な話題が多く出された。ディスカッションのあとも自由に懇談する場があり、フィリピン大学生らは、日本のサブカルチャーに強い関心を持っていることがわかった。それが彼らの日本研究を行う入り口になっていることは間違いない。



写真 5:米野教授の授業に参加

(撮影者：立元圭)



写真 6:発表後のディスカッション

(撮影者：立元圭)

米野教授と会食

その後、教授と私たちが会食をした（写真7、8）。教授には私たちのボランティア活動を非常に高く評価していただいた。フィリピンから日本にやって来た子供たちにとって一番の懸念事項は学習言語である。子供の適応力は高く、日常会話はすぐに使いこなせるようになる一方で、日常では使わない学習言語（内角/外角、哺乳類/爬虫類...など）や学校生活でしか使わない言葉（日直、学活、目当てなど）は理解できておらず、また理解していないことにも気付きにくい。あるいは、話し言葉は使いこなせても、書き言葉や敬語になると途端に正しく使えなくなるという事例がたくさんある。また、書き順も些細なことではあるが、文字を認識する際の重要な要素であり、書くスピードにも影響するため、軽視してはいけない。書き言葉をアウトプットするには年月がかかるが、それでもその部分に特化した学習は必須である。外国から日本にやって来た子供のために、学習と学校での重要語句を集めた単語帳が出版されているそうで、教授からそれをいただけることになった。

また、CFOでの話と重なる部分があるが、日本人とフィリピン人では感情の表現方法が異なる。フィリピンからきた子供たちはもともと陽気で人懐っこい性質があるが、日本の子供達の中ではしばしば浮いてしまう。そのことに気兼ねし、クラスの中で殻に閉じこもってしまうのはとてももったいない。私たちがボランティアで携わっている放課後学習が、学習支援だけでなく彼らの自己表現の場であるとともに、彼らが自信を持って教室や社会に出ていけるような支援をしなければならぬと強く感じた。また、彼らが日本で生き抜いていく術を身につけることは、彼ら自身だけでなく、いずれ労働力不足に陥る日本に大きなプラスになる。私たちが今支援している彼らが、その第一世代となることを期待する。



写真 7: 米野教授と会食 (撮影者: 額田聖菜)



写真 8: 紫いものスープ (撮影者: 額田聖菜)

日誌 1月19日(6日目)

文学部社会学専修4年 額田聖菜

●スケジュール

- 12時 ホテル出発
- 12時半 キアボ教会
- 13時半 ゴールデンモスク、イスラム教徒集住地区
- 14時半 イントラムロス
- 16時 サンチャゴ要塞
- 18時 シャングリラホテル
- 19時半 シューマート (SM)

キアボ教会

フィリピンで一番有名な教会であり、訪ねた時にはミサが行われていた。教会の中には、とても広い礼拝堂がありたくさんの席が用意されていたが満席であった。フィリピン人は敬虔なクリスチャンであると聞いていたが、教会に入りきれないほどたくさんの人が集まっていたことには驚いた。そういった人々のために、教会の外に大きな液晶パネルが設置されており、牧師の説教など中の様子が映し出されていた。



写真1：キアボ教会内部

(撮影者：額田聖菜)



写真2：教会外の液晶パネル

(撮影者：額田聖菜)

教会の前の広場ではたくさんの人が行き交い、商売をする人も多数いた。シャボン玉やアクセサリー類などを売る露店がたくさんあった。その中には黒いロザリオがたくさん売られていたが、これはドライバーさんの話によると、1月の巡礼の際に用いるという。



写真 3：教会前の広場

(撮影者：額田聖菜)



写真 4：教会前の市場

(撮影者：安里和晃)

また、教会の前には市場があり、道を挟んで両側にたくさんの店が並んでいた。野菜や魚などの食べ物を売るものが多く、店前に積み上げられていた。白菜やニンジンなど日本でも見られる野菜がほとんどであったが、日本のものと比べて小ぶりであった。日本のように品種改良はされておらず、原種に近いのではないか、と安里先生は話していた。

ゴールデンモスク、イスラム教徒集住地区

キアポ教会から歩いてすぐのところには、イスラム教徒集住地区があった。露店にはイスラム教徒の男性が被る帽子や女性用の衣装なども売られていた。代表的な建物であるゴールデンモスクの手前にある、管理施設でセキュリティの人に許可をもらい、案内してもらった。モスクでは、男性が祈る場所と、女性が祈る場所は分けられていた。礼拝の時間ではなかったため、モスクにはあまり人がいなかった。またモスクの中では、小さな子供向けに教室が開かれ、授業が行われていた。訪問時はアラビア語の勉強をしていたが英語の勉強もしているとのことであった。



写真 5：ゴールデンモスク内の教室

(撮影者：安里和晃)



写真 6：学校施設内部の様子

(撮影者：安里和晃)

また学校施設も見学させて頂いた。この学校施設へは小学生から高校生まで約 300 人の生徒が通っているとのことである。学校の代表の方に挨拶をしたあと、授業が行われている教室へ案内して頂いた。授業は施設の 2 階で行われていた。大きな一つの部屋をホワイトボードで区切ることで、少人数の授業が行われていた。生徒の中には、韓国系の学生もいるとのことだったが、スカーフを被っていたので、直接確認することはできなかった。この学校は寄付で成り立っているようで、経営は難しいとのことであった。

イスラム教徒集住地区の中では、ムスリムの衣装を身につけている人だけでなく、一般人の格好と同じ格好をしている人も多かった。ここでも子供を多く見かけた。

最後に、管理施設に 2000 ペソとガイドさんに 500 ペソの寄付を渡した。

イントラムロス

西洋風の建物のお店で、昼食をとった。西洋風のバイキング形式であった。このお店にはバンドがいたので、演奏をお願いした。日本人であると言うと、「涙そうそう」や「乾杯」、



「川の流れのように」など日本語の曲を 4 曲歌ってくれた。バンドのメンバーはみな日本で演奏活動をしていたことがあるそうで、そのうちのひとは 1978 年以降 16 回の来日経験があり、名古屋や京都の木屋町で働いていたことがあるという。日本語も軽く話してくれた。彼らは毎日このレストラン働いているとのことであった。

写真 7：フィリピンバンド (撮影者：額田聖菜)

サンオガステン教会

教会の中を見学したが、これから結婚式が行われるようで飾り付けなどの準備をしていた。この辺りは観光地であり、馬車を何台か見かけたが、空いている馬車を見つけることができず、乗ることはできなかった。

サンチャゴ要塞

1571年、スペインにより建てられた要塞である。大砲は対岸にある中華街に向けて設置されていたが、これは経済の中心を担う華人への威嚇も込められていたという。要塞の中には、潮の満ち引きで囚人を殺す留置所などもあった。

1942年には日本軍に占拠され、1945年の戦いで破壊されたという。ここでの戦いを悼む石碑があった。

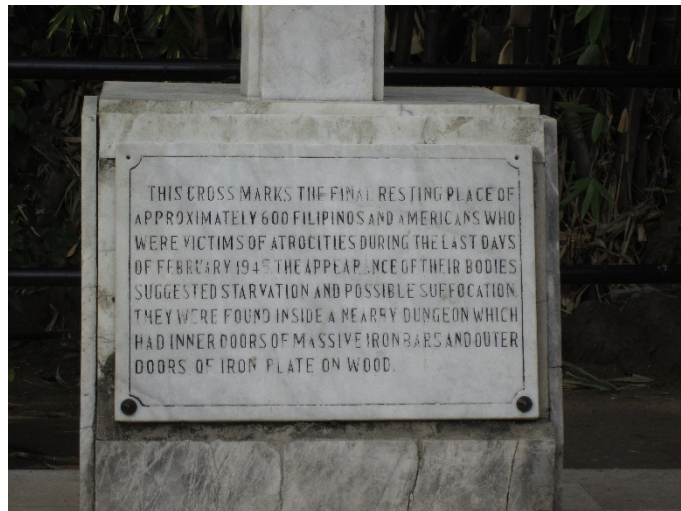


写真 8：サンチャゴ要塞内の石碑（撮影者：額田聖菜）

シャングリラホテル

5つ星ホテルに立ち寄り、アフタヌーンティを楽しんだ。日本の一流ホテルと変わらない綺麗なホテルであり、クラシックの生演奏などが行われていた。ウェイトレスの方は24歳で、OJTではなく、このホテルで正規で働いているということであった。日本人の利用者も多いのか、ホテル内のFree Wi-Fiの設定画面では、日本語の選択が可能であった。Wi-Fiの通信速度も速く途切れることはなかった上、お手洗いもとても綺麗であり、ホテルの中は日本にいるかのような感覚であった。キアポ教会の近くの市場とは出会う人々も設備も全く異なるものであり、改めてフィリピンの国内格差を実感した。また、私たち自身も貧

困地区などを訪問し、彼らの生活を知ったにもかかわらず、こういった高級なホテルで快適に食事することに矛盾を感じた。



写真 9：シャングリラホテルにて（撮影者：額田聖菜）

シューマート（SM）

Kulture、スーパーマーケット、書店へ行った。街の中心部であるからか、日本と変わらない格好の人が多かった。書店では、子供向けのを除いてほとんどタガログ語の本を見かけなかった。メンバーの一人が購入した地図帳では、北方領土はロシアのもの、尖閣諸島や竹島は日本の領土になっていたのが興味深かった。



写真 10：シューマート（撮影者：額田聖菜）

日誌 1月20日(7日目)

文学部社会学専修3年 伊藤志帆

●スケジュール

- 11時 セッション1
- 13時 セッション2
- 15時 セッション3
- 17時 CFOカウンセラーとのセッション

セッション1

- ・セッション参加者の基本情報
 - 18人の女性配偶者が参加。
 - 日本に行ったことのある人は1, 2人。
 - ほぼ全員結婚1年未満で、日本語をちゃんと学んだことがある人は少しだけ。
 - 義理の両親と住む人は1人。
 - 日本で住む場所は、群馬県高崎市、名古屋、埼玉、宮城県石巻市、岡山、神奈川、福島県郡山市、静岡など。
 - 日本に対する不安は、文化、地理地形(迷うのが怖い)、コミュニケーション、言語(方言も含む)、交通事情などに対して感じている。
 - 文化の違いを感じる時はいつかという質問に対しては、時間に厳しい、日本人のほうが真面目、フィリピン人のほうが初対面の人と仲良くなりやすい、気候が違う、食文化が違うと答えていた。
 - 好きな日本食は寿司、キムチ、ラーメン、焼き肉などで、今までに作った日本食はかつ丼、寿司、とんかつ、牛丼、そうめんなどである。
 - 日本に行ってしたいことは、ディズニーランドに行く、桜をみる、スキーをするなど。
 - 働き先は決まってない人が多いが、先生をやりたいという人がいた。

・プレゼン後の質問

守谷へ：どんな時、いつ、だれに対して上着を脱ぐべきか、家族には脱ぐべきか。

伊藤へ：どのように先生が子供に罰を与えるのか。

立元へ：バスなどに英語の案内表記はあるか。

セッション2

- ・セッション参加者の基本情報
- 参加者は19人で、家族、男性一人などいろいろな人が参加していた。
- 日本に行ったことがある人は4人。
- 京都東山でケアワーカーをする予定の人がいた。
- 日本への恐れは、地理地形、文化、言語（読み書き）、コミュニケーション。
- 日本でする（したい）仕事は、工場労働者、介護労働者などだったが、考えていない人も多い。
- 日本で住む場所は、大阪、静岡など。

セッション3

- ・セッション参加者の基本情報
- 女性7人が参加。
- 5人は日本に来たことがあり、そのうち3人が日本に1年以上いたことがある
- 日本に対する不安は、言語、文化、日本人とフィリピン人の考え方の違い（日本人のほうが仕事に対して厳しい）など。
- 日本に対する希望は、幸せで面白い生活を送る、たくさん働く、日本語をもっと学ぶなど。
- 日本では、仕事と携帯電話とシェルターがあれば生きていけると考えている。
- 行先は広島、名古屋、長野、岐阜、豊田、新小岩など。
- 夫の仕事は建設現場だという人がいた。嫌いな食べ物は寿司、いくら、納豆、好きな食べ物は刺身、焼き肉。



写真1: 防寒具のつけ方を学ぶフィリピン人女性（撮影者：立元圭）

CFO カウンセラーとのセッション

学生が行ったプレゼンテーションを、カウンセラーが渡航前のレクチャーをする際の参考にしたいという要望があり、カウンセラー16人ほどの前で滞在最後となるプレゼンテーションを行った。はじめに安里先生が日本で行った **Japanese Filipino Children** に対する学習支援ボランティアの成果と課題について報告した。日本側が作成したパワーポイントは、カウンセラーの日本研究のために提供した。



写真 2: 安里先生によるボランティア活動報告 (撮影者: 立元圭)

カウンセラーからは、次回の CFO 訪問の際は日本の公共交通機関について、日本人との基本的なコミュニケーション手段について、日本でのマナー (Do's & Don'ts)、義理の両親とどのようにして付き合うべきかについてなどの内容でプレゼンテーションをしてはどうかという提案があった。



写真 3: カウンセラー達との記念撮影 (撮影者: CFO スタッフ)

プレゼンテーションを通して考えたこと

各回によって、学生のプレゼンテーション内容にどれほど興味を示してくれるかは程度差があり、女性だけの回のほうが聞き手とのコミュニケーションがとりやすかった。日本への不安や行先はすべての回でほぼ同じであった。予想していたよりも東京に行く人が少なく、名古屋、広島、大阪など地方都市に行く人が多いという印象を持った。聞き手とは、大勢に対して質問するよりも1対1で話すほうが自分のことをいろいろと話してくれた。

学生の用意したプレゼンテーションはやや一方的だったのではないかという反省がある。予想していたよりも渡航希望者たちは日本について知っていたし、ジェスチャーや食文化や行事などの中には類似点も見られたため、既知の内容が多かった参加者もいたのではないだろうか。また、フィリピン人にとってなじみの薄い学校制度や公共機関に関する説明は1回聞いただけでは理解するのが難しいということをもっと考慮し、誤解や勘違いを防ぐために、もっと丁寧に説明するべきだった。

研修報告

フィリピン研修報告書

文学部社会学専修 3年 伊藤志帆

スラム街と 5 つ星ホテルが共存し、多くの矛盾を抱える国。人々がおおらかにたくましく生きる国。私がフィリピン研修を終えて描いたフィリピン像、フィリピン人像は混沌としていて、自分でもまだうまく整理ができていないというのが正直なところです。しかし研修前に比べて、フィリピン社会、文化や渡航希望者に対する理解はとて深まったと感じています。本報告書では、特に印象に残っていることを語ることで今回の活動について振り返ろうと思います。

まず印象深いのは、今回の研修の主な活動であった CFO での 7 回にわたるプレゼンテーションです。1 回目のプレゼンは慣れておらずしどろもどろになってしまいましたが、回数を経るごとに安定してプレゼンできるように内容になり、英語でのプレゼンテーションに自信がつかしました。またプレゼンの最中や前後の時間で日本渡航希望者と会話する機会があり、彼らの置かれている状況や日本に対するイメージを理解する手助けになりました。プレゼン内容に関してはやや一方的なプレゼンになってしまったという反省があります。研修前に、フィリピン人が日本に対して持っている知識をもっとリサーチすべきでした。予想していたよりも渡航希望者たちは日本について知っており、ジェスチャー、食文化、行事などの中には日本とフィリピンの類似点があったのですが、フィリピンにない制度や公共機関についてはあまり知っていませんでした。制度や施設については、誤解や勘違いを防ぐためにもっとスピードをゆっくり何度も説明するべきでした。渡航者がプレゼンの最中に「わからない」という表情をするたび、事前リサーチの必要性や文化の違う相手に自分の文化を説明することのむずかしさをひしひしと感じました。

もっとも衝撃的な経験を挙げるとすれば、橋の下や川沿いに暮らす貧困層の人々を NGO 職員とともに訪問したことでしょう。ストリートチルドレンのことは新聞などで見て知っていましたが、実際にその場に身を置き、動物やトイレのようなにおい、泥のついた手足や顔のまま裸足で走り回る大勢の子供たちなどを見るのはあまりにも大きな衝撃でした。なぜこんなにも貧困に陥ってしまうのだろう、ここで暮らす人たちは自分の生活をどのように思っているのだろう、毎日どうやって稼いで生きているのだろうと疑問が渦巻き、自分の生活とのあまりの違いや、ショッピングモールで買い物を楽しむフィリピン人との格差に愕然としました。彼らの生活を目の当たりにしてもなにもできない自分が悔しく、まずはこの悔しさや驚きを忘れずにしていこうと考えるだけで精いっぱいでした。

日本との大きな違いとして驚いたのはフィリピン人のしゃべり好きでおおらかな性格で

す。特にフィリピン大学で日本研究を専攻している大学院生のゼミを見学させてもらった時に、彼らの活発な日本政治に関するディスカッションに圧倒されました。発表者だけでなくほかの学生も補足事項や自分の意見を次々と述べる態度に、日本の授業での消極的な議論姿勢との差を感じました。授業後に日本についてなんでも質問してくださいという、フィリピン人学生から日本の若者文化についてなどの質問攻めにあいました。彼らの知識の深さと好奇心旺盛な態度にまたまた圧倒されました。初対面でもとてもフレンドリーに話すことができ嬉しく思うと同時に、彼らの姿勢に圧倒されてばかりで悔しく、見習うべきところがたくさんあると感じました。

今回の研修では、日本への渡航者やストリートチルドレンなど、今までの自分が全く想像していない生き方をしている人々に出会い、フィリピン社会や日本社会の矛盾に腹が立つことが多々ありました。それと同時に、フィリピン人の温かさや親しみやすさにも多く触れる機会がありました。自分が経験した社会や文化の違いは、今後ボランティアをする中学生やその母親がもっている背景の理解に役立つと思います。それだけでなく、異なる文化的・社会的な背景を持った者同士が日本で暮らしていくことを考えるうえで重要なことに気づけたと思います。それは、お互いがすぐに分かり合うのは不可能だということです。「話せば相手は自分の文化を理解してくれるはず」と簡単に考えていると、相手が自分にとって不可解な言動をとったときに「なぜ説明したのにわかってくれないのか」と相手をすぐに批判し、摩擦が起きてしまいます。相手を理解できないと思っても、それをとりあえず受け入れる覚悟することこそが異文化理解に重要なのだらうと思います。

フィリピン研修報告書

文学部社会学専修 4年 額田聖菜

今回の研修は、私にとってフィリピンの現状を通して移民の問題、そして貧困の問題について考えるものでした。

私は昨年10月からフィリピンにルーツのある子供たちに対する学習ボランティアに参加しており、移民の問題について関心を持っていました。今回、フィリピン政府の在外フィリピン人委員会で日本へ来る方々にレクチャーをしました。レクチャーの受講者は20人前後と比較的少人数であったため、直接質問をしたり話を聞いたりする機会がありました。その中で驚いたことは、多くの方が日本での生活のビジョンを持っていないこと、そして私たちの考える結婚観とは異なることでした。多くの方はフィリピンに残る家族へ送金することを考えており、多い人では12人も家族のメンバーを送金で支えようと考えていました。しかし日本でどこに住むのか、またどういった仕事をしたいかと尋ねても、まだ決めていないという人がたくさんいました。日本語を話せない人が多く、日本でできる仕事は限られていると思われるなか、そんなに無計画でいいのだろうかという彼らの日本での生活に対し、不安を感じました。また結婚相手について尋ねた際に、自分と年齢の変わらない女性が、50代や70代の男性との結婚を考えていること、そしてそれに対して彼女の家族が反対しないことに驚きました。日本において、結婚は恋愛の延長にあるものと考えられる傾向にありますが、彼女たちにとって、結婚は恋愛だけではなく、社会的地位の向上の手段でもあるのだと感じました。

日本から帰国したフィリピン人女性を支援するNGOへ訪問した際には、日本で暮らす間だけでなく、フィリピンへ帰国した後も人々は問題を抱えるのだと知りました。主にエンターテイナーとして日本で生活したことで差別を受け、元のコミュニティには戻れないと聞き、驚きました。国を超えることは技術的に簡単になりましたが、社会的にはまだまだ難しいものであるし、常に弱者になるのは移住した人々であるのだと気づきました。

このように、日本への移住を希望する人々と話をするなかで、私たちが行っている学習支援のボランティアは、フィリピンと日本の間の移民の問題のごく一部分であると感じました。そして、この移民の問題の根本はフィリピンの貧困問題にもつながっていると感じました。

ストリートチルドレンを支援するNGOへ行き、話を伺いました。想像できないような環境と、そこから抜け出すことの難しさを聞き、理不尽さを感じました。きれいごとでは済まない世界があると思いました。そんな辛い環境で苦しんでいる子供たちを私は想像して

いました。しかし実際にストリートチルドレンだった子供たちを保護する施設に伺った際、元気に走り回る子供たちを見て驚きました。確かに彼らの体は細かったですが、みな笑顔で、そこに彼らの強さ、たくましさを感じました。子どもたちは自分の夢を語ってくれました。自分が同じ環境で、彼らのように笑えるだろうか、という思いが頭から離れませんでした。翌日訪れた、インフォーマルセクターでも、同じことを思いました。川沿いに密集するように家が並び、迷路のようでした。その中を子供たちは元気に走り回っていました。とても狭い空間に犬や猫、鳥と一緒に生活をしていました。動物を飼っているため臭いもきつく、また電灯もなく、真っ暗でした。子どもたちにせがまれて抱き上げると、私でも楽々持ち上げられるほど子供たちの身体は軽かったです。しかしそこに住む子供たちも笑顔でした。ご飯を十分に食べられなくても、しっかりした家がなくても、彼らはそこで笑顔で生活をしていました。私の眼には問題がたくさんある環境のように思えましたが、そこでも笑顔で生活する子供たちの強さに心を打たれました。

滞在中、マニラ市内を車で移動するときに、橋の下、線路の脇、路上、あらゆるところでおなじような貧困コミュニティを見かけました。高い商品を扱うモールや五つ星ホテルがある同じ都市の中で、そういった貧困地域が共存していることに矛盾を感じずにはいられませんでした。日本以上の人々の格差の大きさに愕然としました。どうして同じ国内でもこんなに格差が生まれてしまうのだろうかと考えずにはいられませんでした。

今回の研修の中で、改めて現地・現場へ行くことの大切さを感じました。他人から話を聞くのではなく、自分が実際にその地へ行って体験したり、人々と関わりを持ったりすることは、多くの情報を含んでいると改めて感じました。貧困問題も、移民の問題も一朝一夕で解決できるものではないと思います。個人や民間のレベルだけでなく、国家レベルでの取り組みが必要であると思います。自分にできることはすごく小さいかもしれませんが、しかしそういった問題から目をそらさず、今後も考え、関わっていきたいと思います。

フィリピン研修報告書

文学部社会学専修 3年 守谷克文

私は2014年1月14日～21日の8日間、マニラへ研修に行きました。先のボランティアの成果報告も含めた、結婚移民問題に関する視察を主な目的とした研修で、それ以外にも貧困集落やADB（アジア開発銀行）を訪問しました。

マニラではほぼ毎日、CFOへ赴き、日本へ渡航予定のフィリピン人に日本についてのプレゼンをしたのですが、その中でとの彼らとの交流などを通して、さまざまなものを見聞きすることができました。まず、渡航者に女性が圧倒的に多いというのが印象に残りました。中には日本に何度も行ったことがあり、日本語の上手い方がいて驚きました。しかしそれ以上に驚いたのは、彼女たちの多くが日本に渡ったあとのビジョンをほとんど持っていないということでした。なぜそうなのかは彼女たちの話からは判然としませんでしたが、彼女らの楽観的な性格というよりは「どういう状況であろうが日本に行けば今よりマシ」というような考えが根底にある結果なのではないかと私は考えました。私がそう考えるようになったのは、フィリピンの格差、不健全な雇用を目の当たりにしたからです。

フィリピンは、見るからに雇用が不足していました。路上では飲み物などを売り歩く人や車を洗淨しようとする人で溢れており、仕事にできることはなんでもやってみよう、という想いが見えました。また、私たちが宿泊したホテルでも、従業員のほとんどはOJTと呼ばれる職業訓練生で、彼らは自らお金を払ってそこで働いていました。またホテルのマッサージサービスにおいてもマッサージ師本人の手取りの割合は驚く程低く、搾取の構造が伺えました。経済の未発達、雇用制度の整備不足など、さまざまな理由が考えられましたが、いずれにしてもフィリピンで生活資金を稼ぐのが難しい人があることは明白でした。そういった状況から見れば、アルバイトなどの雇用形態が当たり前に見られ、さまざまな雇用が溢れている日本は、どうやってもフィリピンよりはお金を稼げる場所なのでしょう。

そして、そういったフィリピンの不健全な経済状態を最も肌で感じたのが、ストリートチルドレンの生活するコミュニティでした。彼らは橋の下のお世辞にも衛生的と言えない場所に住んでいましたが、そのすぐ近くには大きなビルや高級ホテルが建っていました。明らかに矛盾した状況でしたが、ストリートチルドレンの彼らは屈託ない笑顔で本当に幸せそうにしていたので、これが問題あることなのかどうかわからなくなってしまいました。しかし、やはり不健全だと感じたのは、一般的な生活を送っている人たちが彼らの現状を理解しようとしていなかったからです。後日訪れたフィリピン大学で、それを強く感じました。

フィリピン大学では、ヨネノ教授が受け持つ大学院生の授業を見学させていただいたあと、その学生とフランクな会話をしました。彼らは日本の政治を勉強している学生ということもあってか、日本のサブカルチャーに深く興味を持っていました。草食系男子や腐女子、仮想彼女などについて改めて問われると、わからないことが意外と多いことに気づかされました。そんな年齢も感性も私たちと近い彼らも、ストリートチルドレンのコミュニティに行ったことがないと言っていました。搾取する上位層はもちろんのこと、中間層もすぐ隣にある下層をほとんど認識しないように生きているというのが私の率直な感想です。ADB やソーシャルワーカーのもとを訪れて、こうした最下層を救う取り組みが行われていることに非常に感動し、興味をもちましたが、私が今回フィリピンで最も強く感じたのは、フィリピンで普通の生活を送る人々がそうした矛盾や格差を正しく認識し、疑問を感じるようになれば不健全な経済状態は解消されないのではないかということです。

結局、今回のメインテーマである移民が抱えるさまざまな問題も、そもそもはこの不健全な経済状態によって移民が増加せざるを得ないことがひとつの根底にあることを考えると、人々が自分の社会の美しくない部分に目を向けることはあらゆる問題の解決にむすびつくような気がしてなりません。次回、機会があるならこうしたところや雇用問題について、よりくわしく調べてみたいです。

フィリピン研修報告書

文学部社会学専修3年 相築理穂

一週間フィリピンに滞在し、CF0をはじめとする様々な移民に関わる機関、あるいはフィリピンの社会そのものに実際に足を踏み入れることができたことは貴重な経験であり、そのどれもが印象深い出来事ばかりであった。

貧困集落を見学したことはとても印象に残っている。テレビなどの報道を通し、ストリートチルドレンなどの存在は知っていたが、実際に集落に足を踏み入れると想像を絶する狭さや暗さ、そして臭いといったものに衝撃を受けた。その日の午前中にアジア開発銀行を見学していたため、まるで地続きの世界とは思えない風景のギャップに驚いた。子供たちが私たちのところに駆け寄ってきて人懐っこく話しかけてくる、そのエネルギーはすさまじいものだった。彼らをたくましく生きている、と形容することもできるが、その日の食べ物を手に入れるのに精いっぱいであり、彼らにとってはそれが当たり前であることを思うと、何とも言えない気持ちになった。少なくともそのような生活は、「満ち足りている」とは言えないだろう。彼らは何を思って毎日を生きているのか、そのようなことを考える隙もないほど飢えているのではないか。それに比べると、施設で保護されていた子供たちは将来の夢を語り、希望を持っていたなあと思う。だが全員を保護することは到底無理であるし、やみくもに富を分け与えればいいわけでもない。自分ができることは、与えられた機会を精いっぱい享受すること、というのがひとまずの結論である。

フィリピン大学では、フィリピンの若者がどのように日本を見ているかがわかり、非常に有意義であった。アジアの国々にとっての日本は悪の権化としてとらえられているに違いないという認識を改めさせられた。特に、日米の関係を冷静にとらえていることに驚いた。フィリピンもスペイン・アメリカの支配下に置かれてきたから、という部分もあるかもしれないし、もしかしたらほかのアジアの国も、存外に理解してくれているのかもしれないと思った。日本のサブカルチャー及びソフトパワーに興味を持ち日本研究を始めた学生が多いと予想はしていたが、予想をはるかに超える熱狂的なクール・ジャパンファンが多く驚いた。漫画・アニメ・ジャニーズだけでなく、草食系男子やK-POPといったごく最近の話題まで把握しているところにはただただ感服した。また、米野教授も私たちのボランティア活動に非常に理解を示していただき、大きな励ましとなった。

そして何より、CF0での活動は貴重な経験だった。日本にいる間にも、事前にCF0については情報をたくさん得ていた。日本にやってくるフィリピン人、とりわけフィリピン人女性が抱える問題は、春日丘中学校でのボランティアを通して知っていた。しかし、実際

にCFOに出向いて彼女たちと直に話してみると、彼女たちは日本に来てからの生活についてほぼノープランでやってくるということに驚いた。住む場所を尋ねれば都道府県程度、仕事は見つけられていない、といったような状態だった。かといって日本語が喋れるわけでもなく、彼女たちの楽観主義には危うさを感じた。

日本の生活や文化についてのプレゼンテーションは、日本にはじめてくる人から何度も来たことがある人まで、さまざまなグループに対し行ったので、それぞれの反応も違い、毎回新鮮な気持ちで挑むことになった。日本で外国人が生き抜いていく際に、何が最も必要なかを考えさせられる機会でもあった。彼らが地域で孤立しないことが大変重要であり、そのためには、彼らが日本の文化や地域社会を理解する努力が必要になる。今回のプレゼンテーションがその一助となればと思うと同時に、受け入れ国である日本人の間にも、もっと移民者に対する理解や歩み寄りがあってもよいのではないかと感じた。

毎日たくさんの人々がCFOにやってきて、カウンセリングやセミナーを受けている姿を見ると、フィリピンにおける移民は国を担う一つの「産業」であることがよくわかった。また、街中で行商や何をするでもなくたたずむ人の多さが、いかに国内での働き口が少ないかを示していた。短絡的に考えれば、もっと国内で働き口を増やすような政策をとればいいのに、と思う。フィリピンについてすぐの頃はそういう印象を持っていた。だが、CFOの職員の方々の取り組みを間近で見、そして自分たちがプレゼンテーションを通しその取り組みに参加する中で、別の考えが思い浮かぶようになった。今の「産業」としての移民は、偽装結婚や人身売買のような問題を抱えている。しかし、もっと制度が整備され、移民が確実に安全なものとして確立されれば、移民はフィリピンにとって誇るべき産業になり得るのではないだろうか。労働力の過不足を調整することはごく自然なことであり、少子高齢化により労働力の枯渇が必至となっている日本にとっても非常に有利なことである。私たちの活動が、日本とフィリピンの関係をよりよいものとするにつながればと思う。

フィリピン研修報告書

文学部言語学専修3年 中元友加里

1日目 マニラ空港からホテルまでの間、たくさんの高層ビルや整備された道路を見て、発展した都市であるという印象を受けた。しかし街へと向かううちに、ジブニーや自転車タクシーなど庶民的な乗り物を見かけた。ホテルに着くと、研修中だという大学生が愛想良くもてなしてくれた。上流ホテルで勤務するためには大学を卒業する程度の学歴がいるのだろうという話になった。

2日目 CFO(Commission on Filipinos Overseas)へ行き、カナダやアメリカ、日本、韓国など各国に長期移住するフィリピン人の多さと移住する人々を手助けする政府機関の多さに驚いた。最初のプレゼンテーションをした。私はプレゼンテーションで「日本人特有のジェスチャー」を紹介した。ジェスチャーの違いというのは時々誤解を生み出してしまう虞れがあると考えたからだ。プレゼンテーションの後、フィリピン人女性に対して、日本で子供を産みたいかという質問をしたが、「わからない」と答える女性が多かった。全体的に日本に移住してからのビジョンがあまり明確でないという印象をうけた。CFOの関係者の話によると、韓国は日本よりもフィリピン人受け入れの体制が整っていて、日本人は移民を受け入れることに積極的でないということだった。

3日目 アジア開発銀行へ行った。経済の成長期であることを示すような建設中の高層ビル群は資産家の投資でしかなく、中には誰も住んでいないことや、多くの優秀なフィリピン人が国外へ出て行ってしまったため、海外の企業がフィリピンに魅力を感じにくく、進出しにくいということを学んだ。また、日本人はお金を自国に貯めすぎており、もっと海外に目を向けて投資をすべきだという主張も耳にした。CFOでプレゼンテーションをした後、ストリートチルドレンを保護しているNGOへ見学に行った。子供達は皆元気で、楽しそうに曲に合わせて踊ったり歌ったりしていて、一見普通の家庭で育った子供となんら変わりないのではと思った。しかしリストカットをした跡がある子供もいた。思春期を迎えた子供達は思い悩みながら暮らしているようだった。

4日目 CFOでプレゼンテーションを終えた後、ストリートチルドレンを支援するNGO団体を訪れた。実際に違法で家を作り、密集して暮らす家族の家を訪れ、絶句した。衛生環境がとても悪かったからだ。やせた犬や猫もうろうろしていた。飼われている犬の中には、

子供達にペットボトルでたたかわれている犬もいた。ペットに対しての扱いの違いに少し驚いた。しかし子供達はやはり元気で、小学生だという女の子は学校がとても楽しいと言っており安心した。しかし、子供たち同士で頭の蚤取りをしている光景を見て、衛生環境を改善する必要性を強く感じた。

5日目 疲れが出たようで、午前中博物館へ行く予定だったが参加せずにホテルに残った。午後は気分がよくなったため再び皆と合流した。CFOでプレゼンテーションをした後に、ストリートチルドレンの母親を支援しているNGOを訪れた。母親達の自立を支援していて、機織り機で服やポーチなど様々なものを作っていた。

6日目 依然として倦怠感が続き、一日中ホテルで寝ていた。食事が合わなかったことや気候の変化などが原因だと推測している。おかゆやマンゴーやポカリスエットで一日をしのいだ。

7日目 気分が良くなったので、かつてのスペイン人居住区へ向かった。要塞を越えると街の風景は一転、石畳や赤煉瓦の建物などが建っていた。境界もヨーロッパ風で、綺麗に整備されていた。かつて日本人がフィリピン人を虐殺していたという場所にも行った。何百人もの人が捕虜となり、牢屋に閉じ込められていたそうだ。この事実を知らなかったことが日本人として恥ずかしかった。次にイスラム居住地区へ行き、地区内にある学校も見学することができた。

8日目 帰国。フィリピンの雰囲気をはっきりと感じられた1週間であった。2日間外に出なかったことは少し残念だが、十分にたくさんのことを学んだ。日本に移住する予定のフィリピンの方とたくさんコミュニケーションをとることが出来た。日本についての知識や日本で暮らして行く上での展望をあまり持っていないということが衝撃的であった。フィリピンから他国への頭脳流出や労働人口の流出も問題になっている。日本の企業が進出しにくいということも問題である。ストリートチルドレンの問題や、インフォーマルセクターの人々のおかげで皮肉にも経済が回っているということ。政府が国の根本的な問題を解決しなければ、いくら多くのNGOが活動しても解決しない問題がありそうだ。私も微力ではあるが、今後もJFC支援ボランティアを通してフィリピンと日本の架け橋となるような活動をしていきたいと思った。

フィリピン研修報告書

文学部地理学専修 3年 立元圭

今回のフィリピン研修は約 1 週間という短い期間ではあったが、様々な機関、施設へ赴き、たくさんの体験をすることが出来た。具体的には CFO での意見交換、日本に出国せんとするフィリピン在住の方々へのプレゼンや、ソーシャルワーカーを通してのインフォーマルセクターへの訪問、アジア開発銀行の訪問など、密度の濃い時間を過ごすことが出来た。フィリピン大学での学生との交流や、観光等も含めて、毎日が非常に充実していた。CFO に関しては、最終的に研修修了証のようなものをいただき、一定の達成感を得ることが出来た。



写真 1 CFO での研修修了証明書をいただいた際の写真

CFO でのプレゼンや、職員、申請者とのコミュニケーションは暗中模索ではあったが、最後になるにつれて方向性も定まり、これからにつながる関係構築が出来たのではないかと考える。個人的な振り返りではあるが、自分自身プレゼンの準備や、CFO や国際結婚、移民問題などについての事前勉強がまだまだ足りていなかったと痛感した。初回のプレゼンが最たる例である。しかしながら、OJT という強みを認識し、回数を重ねるに連れて、プレゼンの内容も選択と集中を繰り返し、改善させることが出来た。これから日本に行かんとする人々に対して、微力ではあるが力になれたのかもしれないという思いと、少しずつ改善を見せる自身のプレゼンにより、達成感を得ることが出来た。フィリピン人の話に

戻ると、この経験で一番記憶に残っていることは、実際にフィリピンの方々と話をした時に、日本のことを良く知らないまま渡航しようと考えている人が少なくない、ということに驚いたということである。この件に関してどこが諸悪の根源なのかは定かではないが、フィリピンにいながらも、日本のことを、それこそ自身がそうであったように、OJT で知ることができるような施策がもっと必要なのではないかと実際に現地に行かせてもらったことから、思った次第である。



写真2 CFOでのプレゼンの様子

その他、インフォーマルセクターでの経験の中から、特にソーシャルワーカーとの関わり合いで感じたことを記述する。2日目の午後に、訪問したNGOにてソーシャルワーカーと話す機会があり、フィリピンではソーシャルワーカーになりたいと思う人が少ない、という話を聞いた。その答えが予想に反していた為、驚きが大きかった。私が見てきたソーシャルワーカーのやっていることは、NGO等の機関にて、インフォーマルセクターとの関係性を構築し、そのようなコミュニティに住む人々の生活を良くしていこうとする仕事であると認識している。フィリピンはストリートチルドレンに代表される、人間として心身ともに健康に過ごす為にあつてしかるべきものを有せずして一日一日生きる人々が数多

く存在している。であるからして、ソーシャルワーカーのような職業を選択する人々がもっと増え、そのような人々をうまく支援出来るようなシステムを作ることが、国が抱える大きな問題の解決の糸口になるのであろうが、現実には逆であると聞いて衝撃を受けたのである。このことは日本においても言える例であり、例えば介護老人施設にて日本人ではなく外国人の職員を雇うといったことも同様の例であると言える。この現状をどのように受け取るかは未だ消化出来ていないことであるため、これからの課題としたい。しかしながら、フィリピンの現状を自身の五感をもって体験したことにより、考えの幅を大きく広げることが出来た。ひいては、日本の問題もフィリピンのそれと、根幹を同じくするのはと見え、客観的な視点から日本を見ることが出来た貴重な経験であった。



写真3 CFO から撮影したフィリピンの街並み

今回のフィリピン研修を、一回だけのものにしない為にも、今回で得た様々なきっかけを大切にして次につなげていければと考えている。具体的には、終盤に新たに開設した Facebook のコミュニティページでの定期的な情報発信や、日野小学校での学校ボランティア、今回の研修の深い振り返りなど、次回の研修までにやるべきことをしっかり定め、入念な準備をすることで、今回の経験や関係性が改めて活かされるのではないかと強く思っている。

ボランティア報告

ボランティア報告 東山

文学部地理学専修 3年 立元圭

わたしは、学校ボランティアで基本的に7年生(いわゆる中学1年生)のボランティアをさせていただきました。教科は主に英語です。スタイルとしては、先生の代わりにプリントを配布したり、問題演習の際に間違っているところがあれば教えたり、学校を休んだ生徒の代わりに、二人組で行うワークに参加したりと、基本的には自由なスタンスで立ち回らせていただきました。英会話の先生の相手役として、生徒たちの前で英会話を披露することもしていました。授業中は、思春期であるからなのか、静かにしない生徒も中にはおり、授業をまじめに聞かなかったり、そもそも授業を受ける態度がほとんど無かったりする生徒も散見されました。しかしながら、授業全体としては先生のスムーズな授業進行により滞りなく進みました。英語の授業では現在、**Be** 動詞や一般動詞の現在形が会話表現も取り入れられ、教科書に準拠したワークシート等の演習も含め、生徒たちに教えられていました。

授業に入らせていただいていた教室には、フィリピンから来た男子生徒(A君とここではさせていただきます)がいました。A君の授業風景や休み時間の様子、少しでも話をさせてもらった経験から、いくつか報告させていただきます。

A君は日本に来て3年目で、現在母親と二人で暮らしています。A君の父親は現在フィリピンにて暮らしているとのこと。日本語は会話に関しては問題ないと言っていい程流暢で、休み時間なども他の日本人の生徒と一緒に遊んでいました。タガログ語はもちろん、英語も習得しており、A君が読書をする際は英語で書かれた本を持ち込んでいました。

一見、A君はフィリピンから来たにも関わらず、学校の授業に関しては何の問題も無く学校生活を送れていると思えるが、英語の授業を見ただけでも、やはりまだ困っているところを確認しました。授業の進行の中に、ワークシートと黒板横のスクリーンを使用し英単語を確認するところがあります。そこではテンポ良く、リズムカルに英単語が映し出され発音された後に、日本語訳がスクリーンに映し出されます。A君は特にこの部分を苦手としていました。理由は単純で、スクリーンに映し出される日本語訳を理解するスピードが遅い為です。日本人の生徒であれば容易に書き写して理解出来るのですが、A君の場合はまず漢字で書かれた日本語訳の「読み」そして「書き」をテンポ良く出来るほどには日本語能力がついておらず、他の日本人の生徒よりも劣っているため、このような問題を抱えるということは至極当然のことです。A君自体、英語の能力は他の生徒よりも優れているとは思いますが、もはやA君にとって英語の授業は日本語の授業を英語で受けているに過ぎません。この状態がこれからも続くと、A君の英語の能力に関しては問題ないが、日頃の復習の

難しさ、テスト問題の読み方、書き方、解き方等、他の生徒とは少し異なるところで英語学習に問題を抱えることになってしまいます。今はまだ中学1年生レベルの英語の授業ですが、学年を重ねて行けば行くほど授業内容も複雑なものとなるので、A君の日本語能力を高めることも当然必要ですが、何らかの形でサポートしていく必要があるのではないかと思います。

授業後の休み時間にA君から話を聞いたところ、英語の授業はやはりそういったところで難しさを感じているようで、他の教科においても、まずは書かれている日本語の理解から始まるために難しく感じているようです。英語でこの状態であるのだから、特に国語などはより難しく感じるのでしょうか。A君によると、フィリピンにいた時は、成績は良い方でしたが、日本に来てからは成績が悪い方になってしまったということでした。日本とフィリピンの教育水準がどれだけ異なるのかは、詳しく分からないので更なる分析は避けるが、彼自身の主観として、今の学校での勉強に満足感は抱けていないようです。

このような問題はA君だけでは無いと思います。A君は日常会話程度の日本語は流暢である為、教室で孤立するというような問題は無かったが、他ではもっと様々な問題があると思います。A君の件に関して言うならば、引き続き学校ボランティアが授業中に補助をしたり、そうでない場合は日本語訳のプリントを配布するなどしたりして、A君のスピードを配慮した対策は容易に取れるはずです。

わたしは2013年の春休みにフィリピンに3週間滞在し、現地の小・中学生とたくさん交流する機会を得ました。そこで見たフィリピンの現状や、フィリピンの人々とのすばらしい出会いはかけがえの無いものでした。日本に帰国してからも、そういったフィリピンでの出会いを風化させたくないと思い、そして何かフィリピンに出来ないかと考えていた矢先、先生からこのような機会を紹介していただき、迷わず飛び込んだ次第でした。

5月から7月という短い期間のボランティアでしたが、A君との出会いを通して、自身のフィリピンでの経験や思いが風化せずにまだ生きていると思える機会になりました。しかしながら、まだまだ短く、見えてきた問題もまだ氷山の一角に過ぎません。2013年後期の自分自身の余力次第ではありますが、このようなボランティアに継続して参加し、考えを深めていく必要があります。そしてこれらの経験を具現化させたものを是非ともフィリピンに還元したいと強く思います。

ボランティア報告 小学校

文学部地理学専修3年 立元圭

ボランティア概要

日本語教室のボランティアは、主に小学生が学級で出された宿題を、放課後に担当教員と学生ボランティアのサポートを受けて取り組むというスタイルです。主な宿題は、国語の教科書の音読の宿題や漢字、算数など他の日本人の児童と同等の宿題に取り組む児童が多いです。中にはまだ日本に来て間もない児童が「日本語の習得」を一つの目的として、比較的簡単な宿題を課されている場合もあります。

2013年12月10日

小学三年生のAちゃんという子の勉強をみました。まず国語の教科書の音読をしました。ふりがなをふっているので漢字は読めるのですが、果たして意味まで分かって読めているのか怪しく時々つまる場所もありました。間違ったところを適宜一緒に読むような形で最後まで読みました。算数の宿題で分数の足し算引き算がありました。簡単にこなしていました。漢字ドリルの宿題も頑張っていました。あともう一人小学二年生のBくんという子の漢字の宿題を見ました。基本的には書けていましたが書き順を間違えて覚えているせいか時々うまく書けないこともありました。一緒に書きながらドリルをやってくれました。二人とも鉛筆の持ち方が少し独特だったのでしっかりとした持ち方を覚えてほしいと思いました。箸の持ち方にも通じるところがありますし、字ももっときれいに書けるようになるかもしれません。フリートークはあまり出来ませんでした。Aちゃんはクリスマスプレゼントに3DSをお願いしたそうです。キティちゃんが好きな活発な女の子でした。

2013年12月17日

先週と同様に小学3年生のAちゃんの宿題を見ました。音読と算数の宿題でした。音読は、先週は難しく読めなかった「場合」という漢字を前回よりもうまく読めていて嬉しかったです。算数はかけ算の筆算だったのですが九九をあまり覚えていなかったため、苦労していました。そして小学2年生のDくんの音読も見ました。感情を込めて読んでいて、とても楽しそうに読んでいました。先週と同じように、小学2年生のBくんの宿題も見ました。音読は、Dくんと同じように「」のところに感情を込めて読んでいたので、意味もおそらく分かって読んでいるだろうと思います。漢字の宿題は教科書の裏の索引を探してやっと漢字が思い浮かぶといった感じで、なかなか大変そうでした。書き順が少し間違

っているところは、一緒に書いて直してもらいました。最後に小学5年生のEちゃんの宿題も見ました。国語の宿題で教科書の文章の感想文を書くというものでした。自分で日本語を考え、自分の言葉で書くことはなかなかボキャブラリーが無いこともあり、難しそうでした。Eちゃんに僕が問いかける形で一緒に答えを作って行きました。Eちゃんは文字をととてもきれいに書いていて、すごく読みやすかったです。

2014年1月7日

7日から、学校がスタートして2014年初の日本語教室でした。3年生のAちゃんの音読の宿題を見ました。3回の音読でいいと書かれていたのですが、5回も読んで少しずつうまくなっていくのを見て、うれしかったです。そのあと宿題が終わったAちゃんとオセロをしたのですが見事に大敗。小学3年生に大学3回生が負けた歴史的瞬間となりました。(小学校の日本語教室には、日本語の勉強のためのパズルやトランプ、かるたなど遊び道具も置いてあります。) そのあと、小学6年生のFくんの算数の宿題をみました。まだ日本語が上手ではないので、算数の宿題も分数の足し算など基礎的な宿題を余分に出されていたみたいです。通分、約分を知らなかったのも、数式自体に日本とフィリピンの違いは無いので学力自体も他の6年生よりも遅れている感じがしました。出来るだけ分かりやすく、通分、約分のルールを教え、覚えなければならない日本語は何度も繰り返して、頭に入れてもらうようにしました。要領を掴めばすこしずつ解くスピードが上がって行くので、感心していました。

総括

まず、まだ3回しか日本語教室に参加していない為、これから先も小学校の児童と関わって行きたいと強く思います。しかしながら、3回の日本語教室ではありますがいくらか考える点が見えてきました。

まず、小学校の日本語教室というコミュニティの強さです。小学校には、フィリピンにゆかりのある児童が約20名います。その児童のほとんどはこの日本語教室に放課後通い、宿題やトランプ、かるたなどのゲームをして遊んでいます。児童たちはみな仲が良く、年上の児童は年下の児童の面倒をしっかりと見ている印象を受けました。日本という異国の地において、自身の母国語でのコミュニケーションが可能なコミュニティが形成されていることは、例えば学校に通うインセンティブの一つとしての役割は大きいのではないかと考えます。フィリピンにゆかりのある人が数多く住んでいるこの地域において、このような機会が提供されているということは、日本語の習得という目的以外にも、プラスに作用している部分があるのではないのでしょうか。しかしながら、日本語の習得が目的ではありま

すが、自身の母国語を多用してしまうのは機会を有効に活用出来ていないこととなります。母国語は必要最低限の使用にとどめ、積極的に日本語でのコミュニケーションがとれるような雰囲気づくりを心がけることが必要でしょう。

次に、小学生が対象のこの日本語教室の可能性についてです。ボランティア報告にも記述したように、基本的には児童の宿題のサポートという目的ではありますが、他にも日本に生活する上で、またこれから成長して行く上で様々なことを伝えて行くことが必要であるし、またそういうことが出来る可能性がこの日本語教室にはあるのではないかと感じます。具体的な例を挙げるとするならば、児童の鉛筆の持ち方や、文字の書き順などをしっかり教えることなどです。また、児童たちが小さい時期にこのようなことを正しておくことも、日本で生活するという点で、またこれから成長して行くという点で必要なのではないかと考えます。日本語教室というタテにもヨコにも強いコミュニティであるからこそ、道徳的な教育もここでしっかりと出来るのではないかと感じます。

以上のように、日本語教室の報告と総括をさせていただいたが、やはりまだ参加回数は少ないと強く感じます。これからも日本語教室に参加して、児童たちとの関係性を深めていきたいです。また、フィリピン研修を通して、日本、フィリピン両国にとってプラスになるようなきっかけを探して行きたいと思う。

ボランティア報告

文学部社会学専修 3年 伊藤志帆

2013年11月7日

わたしが担当したのは中学3年のAさんと中学1年のDさんでした。途中から担当の先生がAさんをみてくださったので、Dさんをマンツーマンで見ました。数学のプリントを10枚ほどしました。1次式の計算と比例式と1次関数の初歩的な内容で、さくさく進んでいたのですが割り算があやふやでよくミスしていました。せっかちなのか、マイナスの付け忘れも目立ちました。また、解答するときに途中式や文章での説明を一切せずに答えだけを書く癖がついてしまっているようです。しかし、数学が好きらしく、つまずいたところを丁寧に説明するとすぐに理解してくれました。担当の先生もDさんにはひらめきのセンスがあるとおっしゃっていました。Aさんのほうは基礎的な内容のプリントのほかに、高校受験の過去問をまとめた問題集を解いていましたが、集中力がすぐ切れてしまうようです。初対面だったのでDさんは最初おとなしかったのですが、すぐに慣れておしゃべりを始めました。30分ほど勉強を続けると集中力が切れてしまうようで、「このプリント終わったら帰っていい?」と冗談で私に聞いたり歩き回ったりしていました。この2人のほか、BさんとCさんがいて、日本語指導の先生と一緒に勉強していました。

2013年11月14日

この日はAさんを担当しました。テスト前でしたが数学の過去問題集や類似問題集を解きました。正負の数や分数などが苦手そうでした。自信がないのか、私に確認しながら回答していたので、本番に向けて1人で全部解ききる練習をした方がいいかもと思いました。この日は総合の時間に人権学習をしたようで、担当の先生にその内容を話していました。このとき、日本人の生徒はあまり好きではないし、陰口を言われたこともあるけれど、私は私なので気にしない、といったようなことを言っていました。

2013年11月28日

この日はAさんとDさんを見ました。Aさんは国語の再試験に向けて、何度もプリントを解き直していました。ほとんど完璧になっていたのですが、漢字のトメ・ハネなどを省略して書いてしまう癖がついていました。Dさんの方は数学のプリントが早く終わってしまったので、「竹取物語」を読んでいました。「翁」「蓬莱」「手柄」「よろづ」などいろいろな言葉の意味を聞かれました。2人ともやることがなかったようで、勉強は早めに切

り上げて雑談をしていました。2人はタガログ語のクイズ本でなぞなぞを出し合っていました。Dさんは小学3年生の時に日本に来たので、少し発音など忘れ始めていることもありましたが楽しそうに出題していました。

2013年12月19日

今日はAさんと、志望校の平成24年度国語の過去問をしました。23-25年度の英数国を先生からもらい、25年度は1回終わったそうです。説明文と詩からの出題だったのですが、長い文章は読むだけでも苦勞するので、読み飛ばしてしまうようです。また、漢字の書き取りや品詞、修辭法（直喩、隱喩）の見分け問題など、問題文に使われている用語もなかなか難しいようでした。また、文章を音読してしまうのも少し心配です。しかしAさんは今学期の成績があがっていたと喜んでいて、やる気がでたようでした。担当の先生も同じ問題を解くと正当率が上がるとほめていました。雑談の時には、日本に来た頃のことについて話しました。本人曰く「がら一んとした何にもない」家で日本語の勉強をして過ごした、最初は授業で何を言っているかわからずぼんやりしていたが、今ではちゃんと受け答えできるなどを話してくれました。

2013年12月26日

13時半から開始予定だったのですが、みんな遅刻をしてきて担当の先生は「受験生なのに自覚が足りない！」とやきもきしていました。15分くらい遅れてA、B、Dさんが、30分後にはCさんも来てくれました。わたしはBさんと志望高校の数学過去問を採点し間違えたところを一緒に復習しました。Bさんも約分や正負の間違いなどもったいないミスを連発していました。文章問題は読むのが嫌なようですぐ諦めてしまいましたが一緒に読むと解けそうでした。場合の数がとても苦手なようで、樹形図を書いて考え方を理解してもらおうとしましたが、難しい問題は腑に落ちていないようでした。Cさんは面接の練習をしていて、Dさんは冬休みの宿題で県庁所在地を覚えていました。Cさんは風邪が長引いているようで、Bさんに体調が悪いと話し、みんなより早く帰っていました。勉強会は3時ごろに終わりました。最後には先生から受験願書の話が出ていました。

2014年1月9日

Aさんが休みで、B、C、Dさんの3人がいました。私はDさんと英語の定期試験とプリントのやりなおしをしました。三単現のSが苦手なようで、Sをつける時とつけない時がまちまちでした。また、否定文や疑問文ではDoes he usesやHe doesn't usesなどと書いてし

まっていた。問題文の意味を理解するのが難しいこともあって、早々と集中力が切れてしまいました。「次の文の傍線部を書き変えて否定文にしてください (I →Aya) I like Japan.」という問題文や「次の2つの文意が同じになるように単語を書きいれなさい。He is an English teacher. He () English.」という問題文で、何が指示されているかわからないようです。普段の話し言葉にはほとんど苦労していないので、問題文の意味がわからないと言われた時は意外に思いました。Dさんは早くから日本にいたので、フィリピンで英語を習得する前に移住してしまったのかなと思います。Dさんは小学生の弟と留守番しなければいけないということだったので、学習会は1時間ほどで終わりました。

総括

ボランティアを通して、様々なことに気づきました。まず学習面では、学習言語に不慣れなため、問題文を理解することがまず課題となります。日本語がわからないために文章問題に取り組むのをやめてしまう様子が多々見られます。数学ではその傾向が顕著でした。「正負の数」「絶対値」など単語が難しく概念理解にいたっていないものもあれば、確率の問題文のように状況設定が独特なため理解が難しいものもあり、日本語がわからないといっても要因は様々であると感じました。英語については、レベルの個人差が激しいです。中学生に上がってから来日した子供は流暢に話す一方、小学校低学年で来日した子供は文法が正確でなく、発音も日本人のようになっています。しかし英語への苦手意識はないようです。生活面では日本人の生徒との間に溝を感じているように感じました。中学3年の生徒は、日本人の生徒の行動を子供っぽく感じているときがあるように思います。授業中に寝ることは特に理解できないようです。また、日本での滞在期間が長い子供ほど英語やタガログ語を忘れ、とっさに日本語が出てしまうという現象が起きるようです。本人たちはそのことを良く思っておらず、英語をもっと勉強したいと言っていました。私に直接言うことはありませんでしたが、自分はフィリピンと日本のどちらに属しているのか証明できないため、アイデンティティを確立できず苦しんでいるのかもしれない。私自身も、自分がボランティアに来る前に持っていたイメージと違うことが多々あって混乱しました。イメージよりも日本人に近い顔立ちであることがまず意外でした。英語が苦手な生徒もいるということでさらに驚きました。彼らと付き合う中で、こういった驚きを「意外と英語が下手なんだね」あるいは「日本人っぽいね」などと伝えてしまうと、彼らを傷付けてしまう可能性があるのではないかと考えます。彼らは自分が人からどう見られているかを必要以上に気にしているように感じられたので、不注意に否定的な発言をすべきではないと

思いました。日本人の押し付けるイメージによって彼らが窮屈に感じる時があると思います。

ボランティア報告

文学部社会学専修 4年 額田聖菜

2013年10月22日

私が今日担当したのは、3年生の女の子のAさんでした。中学1年生のときに来日したようですが、日本語をすらすら話していました。完璧な関西弁です。またお喋りが好きな様子で、たくさん話してくれました。私や担当の先生にはたくさんお話してくれましたが、本人は「クラスではあまり喋れない」と言っていました。

勉強では、数学（二次方程式、中学3年生の内容）と漢字の書き取りをしました。簡単な計算（16・9などのレベル）が苦手な様子でしたが、二次方程式自体は理解していました。漢字（我慢、把握などのレベル）はかなり苦手な様子でしたが、ヒントを出しながら書き取りの練習をしました。勉強に対してはとても熱心でやる気があるように感じました。

彼女は今足を骨折していることもあって、近所に住む女の子が荷物持ちに迎えに来ていました。担当の先生のお話では、何人かこうやって彼女を支えているメンバーが居るそうです。

もうひとり同じ教室で他のボランティアの方に習っているCさんがいましたが、彼はかなり日本語が苦手な様子でした。

また、本来はもうひとり1年生の男の子のDさんが来るはずだったようですが、なかなか来てくれないと担当の先生がおっしゃっていました。今日はこの後、Dさんのもとへ行くとおっしゃっていました。

2013年10月29日

今日も私は中学3年生の女の子Aさんを担当しました。古典と英語の勉強と、日本語スピーチコンテストの練習をしました。担任の先生との面談で、受験のこと（内申点）を考えると、得意な英語を伸ばした方がいいとのことになったそうで、これからは、数学・国語に加えて少し英語も一緒に勉強することになりました。

また、11月2日に京都市内の中学生が集まって行われる日本語スピーチコンテストに出場するそうで、今日はその練習をたくさんしました。少し発音が変だったりするところもありましたが（「一歩」を「いっぽう」と言うなど）、意味はわかるので、しっかりした態度で、スムーズに言う練習をしました。スピーチを聞いていて、とても面白かったので、内容をシェアさせていただきます。

彼女の将来の夢は看護師になることです。これはフィリピンに居た頃からの夢だそうで

す。本当はお医者さんになりたいがハードルが高すぎるのでまず看護師になりたいそうです。理由は人を助ける仕事をしたいからです。日本に来たときは、日本人の「壁を作って、本音を隠して、表面だけで接している感じ」が苦手で、自分でも壁を作ってしまっており、教室でも誰とも話せなかったそうです。でもある日、勇気を出して、英語の勉強で困っている子に声をかけて教えてあげて以降、徐々にクラスでも話せるようになり、今では「うちな、看護師になりたいんやんかあ」と打ち明けられるようになったそうです。

また、日本で困ったこととして具体的に挙げていたのが、みんなで体育の授業を一緒に受けること、数学の内容がまったく違うこと、修学旅行でみんなと一緒に風呂に入ること（「そんなことしなきゃいけないなら、修学旅行に行かない！」と先生方に訴えたそうで、結局彼女だけ別の時間に入れるよう対処していただいたそう）でした。「他にも困ったことあった？」と聞くと、「髪を乾かすこと！」とっていました。「フィリピンでは、髪乾かさないよ。むしろ、朝、髪の毛濡れてないと、『あの子、シャワーちゃんと浴びなかったんだ』と思われるよ！」と怒っていました。

スピーチを聞いて、やはり来日して以降、彼女は日本とフィリピンとの文化の差に悩んできたのだと強く感じました。

2013年11月5日

今日は三者面談のために授業が早く終わったそうで、15時半に着いた際には、Aさんはもう英語の勉強をしていました。今日はその解いていた英語の答え合わせをして、宿題の古典のプリント（和歌）と一緒に解きました。古典はかなり苦手そうで、かなりあてずっぽうに解いているようでした。

彼女に「スピーチ大会で優勝したことを聞いたよ、おめでとう！」と言うと、「まあねー」と照れ臭そうに笑っていました。本人曰く、本番はあまり緊張しなかったし、うまく話せたと思っていたので、良い結果になると思っていたそうです。

私が教えていると、Aさんはいつもたくさん話しかけてくれるので、なかなか勉強が進まなくて担当の先生に申し訳ないです。彼女が「教室ではおとなしくしてるから、ここ（勉強会）に来ると新幹線みたいに喋ってまうねん！（「すごいスピードで話すこと」のたとえです。本当にぴったりの表現で、風速を感じられるレベルでしゃべってくれます）」と言っていたので、「教室では喋りにくい？」と聞くと、「ここでは feel at ease だけど、教室はちょっと冷たい感じ…」と首をかしげていました。

また、今日はCさん（中3男子）の面談の日だったそうで、お母さんとも図書室でお会いしました。担当の先生から「Cさんの面談には通訳の人も来る」と初めから伺ってしまし

だが、実際にお母さんとお会いすると、お母さんはかなり日本語が苦手なようでした。少しお話ししましたが、コミュニケーションをとることが難しかったです（最近よく自転車をパンクさせられて困っている、「日本安全ないね！」という話を聞きました）。また今日は初めて C さんともお話ししましたが、彼と話しているときもしばしば会話がちぐはぐになってしまいました。

2013年11月19日

本日も私は A さんを担当しました。A さんは、先週の土曜日に担当の先生と志望校へ見学に行ったそうです。そのこともあり、明日から始まる定期試験に向け、A さんはやる気十分でした。

明日の試験は数学ということで、二次関数と平方根のプリントを解きました。解き方はだいたいわかっているようなのですが、根気がある問題（計算式が長くなるもの）は途中で嫌になってしまいます。また文章題はそもそも読んでいないか、読み間違いが多かったです。担当の先生と「もう少し粘ってくれー！」と言っていました。定期試験が終わったあとは、志望校の入試問題をやっていくそうです。担当の先生から、志望校の入試問題を見せていただきましたが、国語の問題の文章がすごく長いものだったので、少し心配しています。

また、今日は初めて B さんに会いました。彼は日本語がペラペラです。D さんは「今日は友だちの家で勉強する！」、担当の先生「だめ！ここで勉強してから行きなさい！」というやりとりをしていました（結局そのやりとりを見て、友だちは帰ったので、今日も放課後教室で勉強しました）。昨日は友だちの家と一緒に社会の勉強をしたそうです。

2013年11月26日

今回は B さんの担当の方がお休みだったので、A さんと B さんの二人を担当しました。さっそく先週の定期テストの結果が返ってきたようですが、A さんの国語がよくなかったそうで、他の出来のよくなかった生徒さんたちと再テストを金曜日に受けることになったそうです。B さんと C さんも、再テストを受けるそうです。ということで、今回はひたすら再テストに向けて勉強しました。国語の先生が親切にも再テストの問題と解答を下さったので、もうひたすら暗記でした（その代り、ほぼ満点を取る約束でした）。内容は、漢字の書き取り 20 個くらい（概要、霊峰、自由奔放など）と万葉集・古今和歌集・新古今和歌集の概要の暗記（成立年代や、歌集の特徴など）でした。そもそも漢字の書き取りに出る語句の意味がわからないようだったので、意味を解説して、覚えてもらいました。

勉強の後はたくさん雑談をしました。「フィリピンで好きなお菓子なに？よかったら今度行ったとき買ってくるよ。」と言うと、Aさん・Bさんとも「Toblerone（スイスの三角形が連なるチョコレート）！！」と言うので拍子抜けしました。「スイスのお菓子やん！日本でも買えるし！」と言うと、「いや、日本では小さいサイズしかないねん。大きいのが食べたい！あと白いやつ（ホワイトチョコレート？）も日本じゃない！」と言っていました。

2013年12月3日

今日は6時間目に集会があったそうで、着いてからしばらく時間があつたので、担当の先生とお話しをして児童の背景を少し聞きました。4人ともお父さんが日本人、お母さんがフィリピン人。現在は母子家庭、お母さんは全員同じ病院に勤めているとのこと。Aさんは、お母さんが日本人のお父さんと結婚していたときに生まれたので、両方の国籍を持っているそうです。Aさんのようにお父さんが出生時に出生届けを出して日本国籍の手続きをしている場合以外では、日本国籍の取得を目的に来日するフィリピン人も居るそうで、大抵は日本人の父親と連絡を取り、日本国籍を取得できるそうです。みんなが日本名の名字なのは、お父さんの名字もしくは自分で作ったものだそうです。

今日も私はAさんの担当をしました。去年の過去問題を解いてきた、というので見せてもらったのですが、数学と国語がかなり厳しい状態でした。本人は「国語できた！」と言っていたのですが、漢字の書き取りと記号の問題が半分くらい正解している感じでした。文中から抜き出す問題も難しいようです。数学はそもそも文意がわからないことがあるようでした。今日はもう一度国語の問題を解きましたが、あまり一回目と変わらない感じでした。

雑談では、昨日守谷くんと盛り上がったようで、たくさん話を聞きました。Aさんは、「京大の人は全員信用してる。他の人はあんまり信用しないよ。裏切られるの嫌だから。でも大学生だから、と思って心を開いたら、みんな大人っぽくて、私も大人っぽいから気が合う！と思った」と言っていました。あと、Bさんは12月25日に補講があるそうですが、「教会に行くから休みにしてー！」、「なんでクリスマスに勉強！？」と言っていました。みんな、やはりクリスチャンだそうです。

2013年12月10日

今日もAさんと勉強しました。今日は数学の過去問題と面接の練習をしました。数学の過去問題はもう何回か解いていて、答えを覚えてしまっているようでした。同じような問題を作って、本当に解き方を覚えているかをチェックしていたら、「今日は厳しいー！」と

5回くらい言われました。雑談も挟みつつ、厳しくいきます。

入試には面接もあるので、面接対策のプリントを一緒にしました。「校長先生の名前は?」、「学校生活で一番印象に残ったこと」などでしたが、聞かれたことに正しい形で答えるのが苦手そうでした（例えば、「部活で得たものは何ですか?」という質問に「みんなで目標をたてる。」と答える）。本人は敬語が話せないことと、面接中に英語モードになっちゃったらどうしよう、と気にしていました。また長所と短所についての質問では、担当の先生に「短所は何?」と聞いて「おしゃべりなところ」と答えられて、拗ねていました。相築さんの言っていたように、「おしゃべり」と言われることに抵抗があるようです。

雑談では、「お父さんとかお兄ちゃんとかお姉ちゃんがほしい!」とっていました。Aさんには妹が居るそうなのですが、兄や姉は居ないそうです。また小さい頃からお父さんが居ないので、年上の男の人がどんな感じかわからないとっていました。

Aさんはお母さんより家事が得意だそうで、お母さんとは話はするけど、「どっちがお母さんやねん!」という気持ちがするそうです。フィリピン帰りたい、ともっていました。日本に来たばかりのときは、毎日泣いていたとっていました。

Aさんはカラオケに行きたいそうで、今日はしきりに「(京大の) みんなでカラオケ行こう!」と言われました。「とりあえずAさんの入試終わったらね!」と返しました。

2014年2月4日

今日もAさんと一緒に、一昨年の数学の過去問題を解きました。1ヶ月ぶりに学習ボランティアへ行きましたが、以前より面倒くさがらずに計算するようになった気がしました（相変わらず「計算機欲しいわ~」とは言っていました）。ただ、今日は「1年生の人数はx人で、2年生の人数は1年生より1割多い。2年生の人数をxで表すと?」という文章を理解してもらうのにとっても時間がかかりました。担当の先生も以前から説明しているそうで、今日も30分くらいかけて説明しましたが、まだ怪しそうでした。

AさんもBさんも体調を崩しているようで、マスク姿でした。Aさんは10日に試験なので、少し心配です。担当の先生はAさんに念入りに入試会場への行き方を確認していました。

また、今日はみんなでピーナッツの豆まきしました。みんな楽しそうにピーナッツをぶつけ合っていました。こうやって、日本の文化に少しずつなじんでもらえたらいいなあと思います。

2014年2月25日

受験も終わったので、今日は A さんと駅で見かける漢字の勉強（先発、回数券など）と四字熟語カルタの勉強をしました。A さんと四字熟語を見て、その意味を答えるという形式でやり、意味がわからないものはひとつひとつ説明していきました。

最後にみんなでカルタ大会をしました。とった札の読み方も答えてはじめて札を獲得できるとしたので、B さんは苦戦していました。確かに四字熟語の読み方って独特ですよ。2 回とも D さんが圧勝でした。

担当の先生が、C さんが入試終わってからすごく忘れっぽくなったと嘆いていました。もう 0.1 が何かもわかってないし、10 万円は 1 万円何枚かもわからなくなっている…とのこと。

ボランティア報告

文学部社会学専修 3年 守谷克文

2013年10月28日

本日初めて中学校にいき、ボランティアは無事終わりました。月曜日は中学3年生の女の子が1人と、同じく中学3年生の男の子が2人の計3人が来る予定だったのですが、女の子は懇談のため、男の子2人と勉強しました。また、今日はたまたまクラブがなかったため担当の先生に同席していただきました。今日私は主に、去年来日したという男の子を担当しました。彼は授業の内容はよくわからないものの、一生懸命板書はとっていました。また、日常会話程度の日本語は不自由がないように感じました。漢字書き取りなどはまだ難しそうでした。算数が苦手はまだ九九を覚えきれておらず、現在割り算の勉強中です。今回実際にこうした移民の子供に接してみて、失礼な言い方になるかもしれませんが、かなり「やばいな」と感じました。これから日本で生きていくことを考えると、言語の問題はもちろん、高校に進学する時点で簡単な計算ができないというのは厳しい問題だと思います。当たり前かもしれませんが、まだ中学生の本人にも自覚はないようでした。こういったことは世界中でありふれていることなのだと思いますが、今までまったく関心なかったことが怖くなっていくくらい今回衝撃を受けました。改めて実際に目の当たりにするということの大事さを思い知らされました。以後も積極的に彼らに接していきたいと思っています。

2013年11月11日

今週はBさんとCさんと一緒に勉強しました。Bさんは自主的に勉強に取り組んでおり、たまに漢字の書き取りに不自由するくらいでした。日本の都道府県についての話ができるくらいには日本になじんでいるようでしたし、もちろんまだ問題なく生活するというのは無理でしょうが、自分が彼になにを教えてあげられるか考えないといけないな、と思いました。Cさんは日本語も算数もまだまだ拙いですが、勉強が足りないというよりは本人の気持ちの問題という感じがしました。友達もいないと言っていましたし、高校でのことも考えないようにしている感じでした。彼に会えるのは週に一回で期間も短く、勉強面で十分にサポートしてあげることがどうしてもできないので、どうにか日本で楽しく生活できるようなきっかけを与えられたらな、と思います。

2013年11月18日、11月25日

両日とも A、B、C さんの 3 人と勉強をしました。1 人で 3 人に勉強を教えるのは難しかったですが、かわりに賑やかで楽しくやることができました。先生いわく、そろそろ高校受験を見据えた勉強をしていきたいということだったので、過去問を実際に解いてみたりして、どの程度学力が届いているのかを見ました。3 人とも英語はできるようでしたが、国語と数学が結構危うい状況といった感じでした。ただ B さんと C さんの受験する高校は、複数回ある説明会に参加するたびに点数がもらえるといったような仕組みらしく、合格に関しては問題ないかもしれないというようなことを本人たちは言っていました。3 人ともこの間高校の説明会にいつてきたらしく、結構自分のいく高校のことを知っていました。A さんの行く学校は勉強重視らしいのですが、男の子 2 人の行く学校は進学を目的とするクラスは別枠の入学試験が設けられており、彼らの入学ルートでは情報コースやスポーツコースに配属されることになるそうです。そうなったとき、今教えているような勉強はあまり使わなくなると思います。僕が懸念するのは、勉強とは別の能力が必要になったときに在日期間が短いために問題が生じるのかどうか、その問題について自分が何かしてあげられるのかということです。雑談では、いつも恋愛話が一番盛り上がります。そのあたりの事情はそんなに違いを感じませんでした。最近の中学生はませているな、と思いました。他にはフィリピンのことをたくさん聞きました。観光地などにはあまり詳しくありませんでしたが、ご飯とメガネザルと怖い人たちの話はたくさんしてくれました。フィリピンの人はみんなボラタイルチョコが好きで、ぜひお土産にはそれを買ってきて欲しいとのことでした。

2013 年 12 月 2 日

今日もいつもの 3 人と一緒に勉強しました。今はみんな学校から出された学プロという受験対策の問題集をやらなければいけないらしく、それをやっていました。勉強会で日本人のイメージの話をしていたので、彼らにそのことを聞いてみたところ、小学校のころ教えられた戦争関連の話のせいで結構日本人に怖いイメージをもっていたらしいです。今は性格が子供っぽい人が多いという印象だそうです。また、近々京大生のみんなと遊びに行きたいとずっと言っているのので、次に彼らと会う人は話を聞いてあげてください。京大に連れてきてあげたらいいのではないかと思います。

ボランティア報告

文学部社会学専修 3年 相築理穂

2013年11月8日

今回もAさん、Bさん、Cさんのうち、私はBさんを中心に教えました。

内容は数学の問題のやり直しと基礎問題で、やり直しは計算問題でしたが、プラスマイナスの付け間違いなどでなかなか正解までたどり着けませんでした。基礎問題は二次関数の問題でしたが自分で解かず私に解き方を聞いてしまう状態でした。また、卓球部の練習があるので、30分程度しか補習の時間がとれず、内容はあまり進まずじまいでした。

Aさんはスピーチコンテストで優勝したそうです。内容は京都教育大の喜屋武さんがみておられたのでわかりません。終わりがけに先生と進路の相談をしていました。

初めてCさんと会いましたが、パソコンを使った学習のプログラムがあるらしく、中学校の先生方や立命館大学の先生と一緒にパソコンのところにいました。

立命館の先生のお話も伺いました。「どこでつまづいたか」「それをどのように説明すれば理解してもらえたか／あるいはしてもらえなかったか」を教科書に沿った形で（付箋を貼付けていくようなイメージで）デジタルに集積していき、後々に役立てたり、似たようなプロジェクトをおこなっている中学校や小学校と共有できるようなプログラムを考えておられるようです。ただ、今日のような状況ではあまり具体的に学習の内容に踏み込んだことができていないので、私としてはまだ少し難しいかな、と思いました。ですが、今は曜日ごとの進度や伝え方のコツなどがうまく引継いでいない感じがあるので、それぞれの報告がネット上で共有できたり、それがカテゴリごとに整理されているだけでも役に立つと思います。

帰りは地下鉄駅まで送っていただきました。

2013年11月29日

三名とも16時過ぎまで国語のテストの追試があるので、放課後学習は遅めに始めるとの連絡を事前に受けました。そこで16時過ぎに行ったのですが、連絡が行き違っており、今まさに帰ろうとしている三人と校門で会いました。帰ろうとしているところを引き留めるのも申し訳ないかなと思い、放課後学習をするかどうかは本人たちに任せようと思ったのですが、Aさんが率先して学校に引き返し、後の二人もそれに続きました。結局もう一人の大学生ボランティアの方はこなかったもので、一人で三人を見ることになりました。

国語の追試が三人ともすぐに終わったこと（Aさんは満点だったようです）、いつもは勉

強にあまり集中できないBさんが過去問を既に解き終えていたことなどから、最近はそれなりに順調に学習できているようなので、たまには良いかなと思いあまり勉強は進めませんでした。

Cさんは最初のうちは課題をしていましたが、一段落つくと私、Aさん、Bさんのそばに来て少しですが会話に参加していました。

Aさんは恋愛小説にハマっているようです。見せてもらおうと横書きの小説だったのでびっくりしましたが、ふりがながふってあり読みやすそうでした。また、わからない言葉も時折出てくるらしく、質問されました。日本語で文章を読むのが嫌い、と初めてボランティアに行った時に言っていたので、日本語に対する抵抗感が少し薄れてきたのかなと思います。

Bさんは卓球への熱い思いを語ってくれました。キャプテンなどの役職にはついていないようですが、チームの中心になって声をかけるような立場だったそうです。引退後も週に一回は顔を出しているのですが、後輩の育成には手を焼いていると言っていました。Bさんは、卓球について話す時はいつも以上に饒舌で熱がこもっていて、卓球が好きであると同時に心の拠り所のようなものになっているのかな、とも思いました。

その他、冬季補習への不満やクリスマスプレゼントの要求など取り留めなく話しました。会話の中で気付いたのですが、熟語だけでなく慣用句なども通じにくいと感じます（余談ですが「ドッペルゲンガー」も通じませんでした。世代差かもしれません）。熟語だと聞き返してくれますが、慣用句などはわからなくても流されてしまうことが多いと思います。

わざわざ引き返して放課後学習（今回はほとんど雑談でしたが）に来たり、会話の中でも「京大生はみんないい人」と言ったりして、こちらのことをかなり受け入れてくれているのだということを改めて感じました。

2013年12月6日

今日の課題が分数の範囲でなかなか教えるのが難しく、二人掛かりで教えることになりました。

日本人にも分数の概念を伝えるのは難しいので、日本語がまだ使いこなせていないCさんに説明するのは骨が折れました。図などを使って説明すると、少し理解してもらえたかなと思います。ですが、「個数」を問われる問題（ $1/7$ はいくつ必要ですか？など）に対して「 $4/7$ 」と答えるなど、問いの意味が理解できていないことが多くありました。AさんとBさんに比べて、Cさんは口数がとても少ないのですが、集中力が途切れると立ち歩き始めます。その間も終始無言なので、私は何となく気まずいなあと思うのですが、本人はあま

り気にならない様子でした。

防寒具はコートも一切持ってないらしく、とても寒そうにしていました。

2013年12月20日

今日はAさん、Bさん、Cさんの3人とも来ました。教育大の人はこなかったので、私一人で3人を見ることになりました。AさんやBさんと雑談が盛り上がるのはいつものことですが、今日はCさんが反応を見せてくれました。少しは慣れてきてもらえたのかなと思います。

Aさんは自主的に数学の宿題のプリントを解き始めました。内容は式の計算です。ほぼ自力で解くことが出来ていました。

Bさんも数学の計算プリントをやっていましたが、1枚終わるとすぐにおしゃべりを始めてしまいました。隣でAさんが問題を解き続けていたので、引き摺られてAさんも喋ってしまうかも心配したのですが、あまりそういうこともなく、ちゃんと勉強を続けていました。Aさんに比べ、Bさんは志望校への思いが弱いせいもあるかな、と少し思いました。

2014年2月7日

15時15分くらいに着いたのですが、既に面接の練習が始まっていました。相手は男の先生で、優しそうな方でした。最初のうちは比較的集中しつつも楽しそうに練習していたのですが、日本語教室の先生が様子を見に来られると雰囲気が一変。「だらだらするな」「ボタンをちゃんと閉めなさい」など厳しい言葉をかけられたため、逆にやる気が殺がれてしまったように感じました。Cさんが特に拗ねてしまっていました。もともと日本語が上手く出て来ず、準備していた質問以外は上手く答えられていなかったのですが、さらに「答える気が無くなってしまった」という感じでした。

面接の練習が終わったあとは勉強会となりましたが、AさんとBさんは珍しく自分から「過去問を解きたい」と言い出しました。Cさんは「もう帰る」と言っていたのですが、結局勉強していました。

Aさんは国語の過去問を解きました。現代文の問題は比較的文意を理解していたようですが、現代詩の問題は日本語のニュアンスを読み取らねばならず、不正解が目立ちました。また、文法・語彙の問題は正答率がかなり低かったです。直前ですが復習しておくように言うておきました。

Bさんは高校の説明会で配られた練習問題を解きました。一度解いたことのある問題だったのでほぼ正解していました。ですが、集中が続かないのは相変わらずで、すぐにおし

やべりに移行してしまいました。

帰り際には三人とも機嫌をなおし、教育大の人にいたずらをしかけるなどしてはしゃいでいました。

2014年2月21日

受験も無事に終わり、課題は

- ・街中で見かける熟語
- ・健康調査書の読み方
- ・四字熟語
- ・日常で使う計算

となっていました。

プリントと実際の健康調査書を使って読み方と意味を確認しました。読み方は所々つまずき、正答率は7割くらいでしたが、意味は完全に理解していました。どこでその漢字をみたか、などで記憶しているようです。学習用の用語と比べて、問題は少ないのではないかと感じました。

Bさんは、日本の政治に興味があるようです。日米、日中の関係について関心があり、日本が将来戦争をするのではないかと、言っていました。私も知っている限りの知識で補足説明をしておきました。もともと、フィリピンにいる時から歴史の本が好きだったと言っていました。

また、その関連で日本人のイメージについても聞くことができました。フィリピンのゲームでは、悪役はスペイン人と日本人なのだそうです。唾を吐いたり、日本語で汚い言葉を使うので、日本語のわかるBさんは気分がよくないそうです。Bさんのいところがそのゲームをしているので、「ゲームの中で描かれる日本人が日本人の本当の姿だと思って欲しくない」と言っていました。

それと、Bさんはフィリピンのご飯より日本のご飯の方が馴染んでいるようで、フィリピンでしばらく過ごしたらお腹を壊した、という話をしていました。フィリピンにも日本のお米は売っていますが、おめでたい時にだけ食べるものなのだそうです。日本のもち米みたいなものかな、と思いました。

課題が終わったのでいつもより早く帰れそうでした。Cさんは17時ごろ帰りましたが、Bさんは「ほかの人と一緒に帰るのが嫌だ」と言って残り、私とAさんも一緒に残ることにしました。3人の中ではBさんが一番、一般の生徒と一緒に帰ることを嫌がっているように感じます。

ボランティア報告

文学部言語学専修 3年 中元友加里

・JFCの生徒たちへの学習支援を通して、彼らは全体的に数学が苦手だという印象を受けました。基本的な数式の理解はしても、文章題になるとかなり苦戦しているという印象を受けました。

・理科や国語などでは、解答が分かっているのにもかかわらず、その答えを言語化できないために点数がとれないことが問題であると思いました。漢字や文字の基礎をしっかりと教える必要があると思いました。日々の授業についていけないということが、勉強をするモチベーションの低さに繋がっていました。

・間違ったところを訂正し、正解した時にしっかり褒めるようにすると、徐々に集中して取り組むようになりました。「学校の先生は叱ってばかりだが、ボランティアの先生はほめてくれる」ということを言っていました。

・「勉強に集中出来ない、高校に進学したくない」と言う生徒がいました。彼は日本語を読むことが得意ではなく、自分が同学年の生徒よりも年上であるにもかかわらず、他の生徒よりもテストで点がとれないことに悔しさを感じていました。中学生という多感な時期には、年上であるのに年下のしていることが出来ないという理由でプライドが傷ついてしまうことがあることに気づきました。また彼は、「高校に行きたくない」と言ったことがきっかけで担当の先生に強い口調で咎められ、暴言を吐いて先生に反抗していました。その光景を見ていた他のJFCの生徒は、「先生は、まず話を聞けばいいのにすぐ厳しい口調で怒る」と、言っていました。ちょっとしたことがきっかけで心を閉じてしまいかねない、多感な時期なので、言動や態度にも気をつけなければいけない点がある、と思いました。

平成 24 年度採択 大学の世界展開力強化事業

「開かれた ASEAN+6」による日本再発見—SEND を核とした国際連携人材育成
フィリピン大学・フィリピン政府派遣実施報告書(2013 年度)

2015 年 3 月 発行

編集 安里和晃、額田聖菜、伊藤志帆、吉田絵弥

発行 京都大学アジア研究教育ユニット (KUASU)

住所 〒606-8501 京都市左京区吉田本町

電話 075-753-5678

印刷・製本 ㈱田中プリント

電話 075-343-0006